令和２年度（第５９回）農林水産祭

第26回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組むむらづくり】

―業績発表及びディスカッションの内容―

開催日時	令和３年２月２８（日）１３時３０分～１６時００分
方法	Web 配信によるオンラインでの開催
主催	農林水産省・ 公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和３年５月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発 行 に あ た っ て

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和３年２月２８日（日）『若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組むむらづくり』をテーマに、平成２年度農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞者である「高根フロンティアクラブ」の業績を取り上げて、６０名を超える皆様の参加の下、開催しました。

今回は、農林水産祭シンポジウムとしては、初めてＷｅｂ配信によるオンラインでの開催となりましたが、全国各地から参加頂くことができました。

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和３年５月

公益財団法人　日本農林漁業振興会

令和2年度（第59回）農林水産祭

（第26回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目　　次

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・・・1

シンポジウム出席者・・・・・・・・・・・・・・・2

受賞者の業績概要・・・・・・・・・・・・・・・・3

シンポジウムの記録・・・・・・・・・・・・・・・4

令和２年度（第５９回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組むむらづくり】

《スケジュール》

１３：３０～１６:００

（敬称略）

１　開　　会（13：30）
　　公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事　　小栗　邦夫

２　挨　　拶　農林水産省北陸農政局長　　岩濱　洋海
　　新潟新潟県農林水産部長　　山田　治之
　　村上市長　　高橋　邦芳

３　選賞審査報告　農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査　　福与　徳文
　　（茨城大学農学部教授）

４　業績発表　　令和２年度むらづくり部門天皇杯受賞
　　高根フロンティアクラブ　会長　　鈴木　信之
　　〃　　事務局員　　能登谷愛貴

・・・休　　憩　　(14：30～14：40)　・・・

５　ディスカッション　(14:40)
（登壇者）
・コーディネーター
　福与　徳文（３に同じ）
・業績発表者
　鈴木　信之（４に同じ）
　能登谷愛貴（　〃　）
・コメンテーター
　畠山　智之（農林水産祭中央審査委員会委員（ＮＨＫ放送研修センター
　　日本語センターエグゼクティブアナウンサー））
　高橋　邦芳（２に同じ）
　寺尾　　仁（新潟大学工学部准教授）

（内容）
・意見交換、質疑応答
・総括

６　閉　　会(16：00)

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（第２６回）出席者

R3.2.28（敬称略）

区　　分	氏　名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	鈴木　信之	令和２年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 高根フロンティアクラブ　会長
	能登谷　愛貴	〃　　事務局員
コーディネーター 及び選賞審査報告	福与　徳文	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 （茨城大学農学部教授）
コメンテーター	畠山　智之	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 （ＮＨＫ放送研修センター　日本語センター エグゼクティブアナウンサー）
コメンテーター	寺尾　仁	新潟大学工学部准教授
コメンテーター	高橋　邦芳	村上市長
挨拶	岩濱　洋海	農林水産省北陸農政局長
	山田　治之	新潟県農林水産部長
	高橋　邦芳	村上市長
司会・進行	小栗　邦夫	（公財）日本農林漁業振興会　常務理事

むらづくり部門

出品財　むらづくり活動

高根フロンティアクラブ

新潟県村上市

１　地域の概要

村上市は、新潟県北部に位置する。同市高根地区は特定農山村地域・振興山村地域・過疎地域・特別豪雪地帯に指定される山間農業地域であり、水稲を主とする農業と林業が営まれている。

小学校の廃校や農業後継者の減少など集落の存続が危ぶまれる状況から、自分たちの手で地域の自然を守り、自ら地域を変えていこうとする集落の有志により「高根フロンティアクラブ」が平成８年に設立された。

２　むらづくり組織の概要

高根フロンティアクラブは、20～60 歳代の地区の有志 43 名で構成されており、地域外への情報発信及び地域内外の交流促進の役割を持つ組織である。地区内の他組織と連携・合同で事業を実施しているほか、地域外の応援団とも連携して地域活性化に取り組んでいる。

また、同クラブの活動が刺激となり、平成 28 年に 40 歳代以下の若手が「（一社）高根コミュニティラボわぁら」を立ち上げ、むらづくり活動を展開している。

３　むらづくりの取組概要

（１）農業生産面

①　棚田の耕作状況調査等を通じ、後継者育成や米作りサポートなどの耕作支援と直接販売の販路拡大支援の両面が重要であるとの考えに至り、棚田米の販売や稲作サポートを組み合わせた「準村民制度」の創設に向けて活動している。

②　廃校を利用した農家レストラン「IRORI」では地元産そば粉 100％の手打ちそばが好評であり、校舎内の加工場で生産したどぶろくなど６次産業化にも取り組んでいる。

③　東京都墨田区の商店街との交流により、棚田米や新たに開発した特産品などを販売する「高根物産展 山里の収穫祭」が開催され新しい販売の流れになっている。

（２）生活・環境整備面

①　地域の課題を整理し、10 年後を見据えた「たかね みらいづくりビジョン」を活動方針として決定。ビジョンの柱の１つを「新しい寄り合いづくり」とし、空き家を活用した集落の人が手軽に集える場と機会を提供。集落の子供の勉強や遊び場、高齢者の介護予防としてのお茶のみ場づくりに意欲的に取り組んでいる。

②　都会の人が高根の暮らしを体験するなかで交流を深め、地域の担い手を増やすことに繋がる取組として、空き家を整備し、体験プログラムの企画・実施を行っている。現在、２人が定住して農林業の担い手となっている。

③　首都圏の大学生や企業と連携し、ブナ林・どんぐりの森づくりを行い、学生、社員やその家族が定期的に訪れるようになり、都市との新たな交流を創出。高根に魅せられ、移住する若者や地域おこし協力隊の若者の増加に寄与している。

４　他地域への普及性と今後の発展方向

本取組は、都市と農村の交流の場作りにより他地域からの住民の移住に成功している事例であり、今後の取組の発展が期待できる。

若い世代を含む住民が地域の課題を共有し、納得したうえで自発的に活動し効果をあげている本取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会　小栗　邦夫

敬称略（以下同じ）

ただいまから「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を務めております、日本農林漁業振興会の常務理事の小栗でございます。

本日は、コロナ禍の厳しい状況が続いているため、オンラインでの実施といたしましたが、多くの方々に参加いただき、まことにありがとうございます。

農林水産祭のシンポジウムをオンラインで開催するのは初めてでございます。思わぬ不手際が生じるかもしれませんが、辛抱しておつき合いのほどよろしくお願いいたします。

このシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと、例年開催しているものでございます。

農林水産祭は、昭和37年に始まり、今年で59回目を迎える伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は７つの部門に分かれております。過去１年間で各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました400近い出品財がございます。これらのうちから厳正な審査を経まして、天皇杯、内閣総理大臣賞、振興会会長賞の三賞が授与されております。

このうち、特に天皇杯につきましては、我が国で天皇杯というものが約30授与されておりますが、農林水産業以外は全てスポーツの関係でございまして、代表的なものでは、正月の天皇杯サッカーなどがございますが、天皇杯を１つの分野で７つもいただいていることで、ご皇室の農林水産業に対する熱い思いを大変ありがたいことと思っているところでございます。今年度も11月の勤労感謝の日に、東京の明治神宮会館におきまして表彰式典が開催されたところでございます。

本日は、その中からむらづくり部門で天皇杯を受賞されました、新潟県村上市の高根フロンティアクラブの方々に参加いただきました。改めてお話を伺うとともに、学識経験者の方々とも意見交換をお願いしたものであります。天皇杯受賞後は何かとお忙しくなられたと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めまして、お祝いと御礼を申し上げます。

また、本日の開催に当たりましてご協力いただきました新潟県と村上市の関係者の方々にも厚く御礼を申し上げます。

それでは、本日は、農林水産省からは、北陸農政局の岩濱局長からビデオメッセージをいただいております。ご紹介いたします。

【挨拶】農林水産省北陸農政局長　岩濱　洋海

北陸農政局長の岩濱でございます。

本日のシンポジウムの開催に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

初めに、令和２年度農林水産祭むらづくり部門において天皇杯を受賞されました高根フロンティアクラブの皆様、まことにおめでとうございます。高根フロンティアクラブでは、10年後を見据えた将来ビジョンをつくり上げ、遊休地にひまわりを植えてのイベント開催、廃校を改修した農家レストランでの手打ちそばの提供、校舎内の加工場でどぶろくを商品化するなどにも取り組んでおられます。

また、平成28年には、若者が別組織を立ち上げ、空き家をゲストハウスやシェアハウスとして整備し、都会の人に高根の暮らしを体験してもらう取組など、地域住民が一体となり、自発的に活動し、大きな成果を上げられておられます。

本日は、農林水産祭中央審査委員会むらづくり部会の福与主査から審査報告をいただいた後、高根フロンティアクラブの鈴木信之会長と能登谷愛貴さんから取組を発表いただき、その後、有識者によるパネルディスカッションを行うこととしております。

北陸農政局管内でも人口減少や高齢化が進む中山間地域の活性化をどのように進めていくべきかといった課題を抱えている地域がありますが、本日のシンポジウムが、こうした地域の方々、また、本日ご視聴の皆様方の今後の取組を進める上で一助となることをご祈念申し上げます。

最後に、本日のシンポジウム開催に当たり、新潟県及び村上市を初めとして、ご協力をいただきました関係機関、団体の皆様に感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

本日はまことにおめでとうございます。

○司会　ありがとうございました。

続きまして、新潟県からは農林水産部の山田部長からやはりメッセージをいただいております。ご紹介いたします。

【挨拶】新潟県農林水産部長　山田　治之

皆さんこんにちは。新潟県農林水産部長、山田でございます。

令和２年度農林水産祭優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

今回はオンラインでの開催となりましたが、多くの皆様から参加していただくことができました。今シンポジウムの開催に向け、ご尽力を賜りました農林水産省をはじめ、日本農林漁業振興会など、関係された皆様に厚く御礼を申し上げます。

本日のシンポジウムは、今年度農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞された、本県の高根フロンティアクラブの取組を検証していただき、広く普及させていくことを大きな目的として開催されるものと伺っております。

高根フロンティアクラブは、地域の有志の皆様が将来を考え、的確な現状分析と現実的な将来ビジョンを策定し、そのビジョンの実践を推進する組織をつくり上げ、多くの成果を上げておられます。

この取組からもわかりますが、成功のポイントは、地域の皆さん自らが主体的に考え、主体的に行動することであると考えております。

本日のシンポジウムを機に、農業・農村の維持発展に向けた取組が全国各地で展開されることを大いに期待しております。

結びに、本日ご参加の皆様方のご健勝、ご活躍を祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○司会　新潟県、山田農林水産部長のメッセージでございました。

続きまして、地元の村上市からは、高橋市長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】村上市長　高橋　邦芳

皆様こんにちは。ただいまご紹介いただきました、村上市長の高橋でございます。

本日は、令和２年度農林水産祭優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催、まことにおめでとうございます。

また、今、引き続き、全国的には新型コロナウイルス感染症、厳しい状況が続いているわけでありますが、その中でのオンラインでの開催ということで、大変ご苦労があったか

と思いますが、ありがとうございました。

本市にとりましても、そうしたコロナ禍の中にあって、実は昨年、高根フロンティアクラブの会長の鈴木さんからこのお話をお聞きしたとき、本当に飛び上がるほどの喜びであったことを記憶しております。そうしたこれまでの取組が大きな賞に導かれたということは、本当にありがたいなと思っておりまして、本市、村上市にとりましても最大の喜びでありましたし、市民にとりましても大いに誇りに感ずることができる瞬間であったなと思っている次第であります。

これまで高根フロンティアの皆さんの取組、先だっても少しお話をさせていただいたのですが、具体的には、平成８年からの取組がスタートということで、実は数えてみますと20年を超える時間が経過しているとのことであります。

その中で、当初から外からの人材を高根に引き込む取組をされていました。また、ＩＲＯＲＩに代表されるような農家レストランなども相当早いタイミングでスタートをされていて、一つ一つの取組を見ますと、先進的な取組がたくさんあったなということで、こうしたまちづくりの手法をいろいろな形で取り入れていることに非常に驚きも感じたわけでありますが、いよいよそれが20年の時を経て、大きく花開いていると。

それと同時に、現在、人口減少の中にありますが、そうした人口減少の中でコミュニティを維持するという一つの回答例がここにあるのだろうなと思っておりまして、先日も、ぜひ本市にとってのリーディングプロジェクトとして、もっともっと各地域に広げていただきたいということをお話しした記憶があります。

本日は、それぞれ各界のご知見を持っていらっしゃる皆様方、ご出席をされておりますので、ぜひこれまでの取組にご評価をいただきながら、また、これからの自治体のあり方についてもお知恵を拝借できればありがたいなと思っている次第であります。

本日は何とぞよろしくお願いをいたします。

○司会　ありがとうございました。

高橋市長には後ほどのパネルディスカッションにもパネラーとして参加いただきます。

次に、選賞審査報告に入ります。

選賞審査報告は、審査委員会分科会の主査であります、茨城大学農学部教授、福与先生からお願いいたします。

それでは、福与先生、よろしくお願いいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査　福与　徳文（茨城大学農学部教授）

それでは、私から、14時30分ぐらいをめどに選賞審査報告をさせていただきます。申し遅れましたが、むらづくり分科会の主査を務めさせていただいております、茨城大学の福与と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

むらづくり部門で、高根フロンティアクラブが天皇杯を受賞されたわけですが、「若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組むむらづくり」ということで、ちょっと異例と言えるかもしれない標題がついています。

令和２年度（第59回）農林水産祭
優秀農林水産業者に係るシンポジウム
若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組むむらづくり

選賞審査報告

令和3年2月28日

農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会
主査　福与徳文（茨城大学教授）

高根フロンティアクラブの活動は、廃校を活用するとか、空き家を活用するとか、遊休地を活用するとか、棚田を保全するといった、それぞれ一つ一つをとっても、学ぶべき取組が多いわけですが、それらを総括して評価すると、標題に書かれているとおり、「若者の目もキラキラ、世代を超えて自発的に取り組む」といったところとなります。

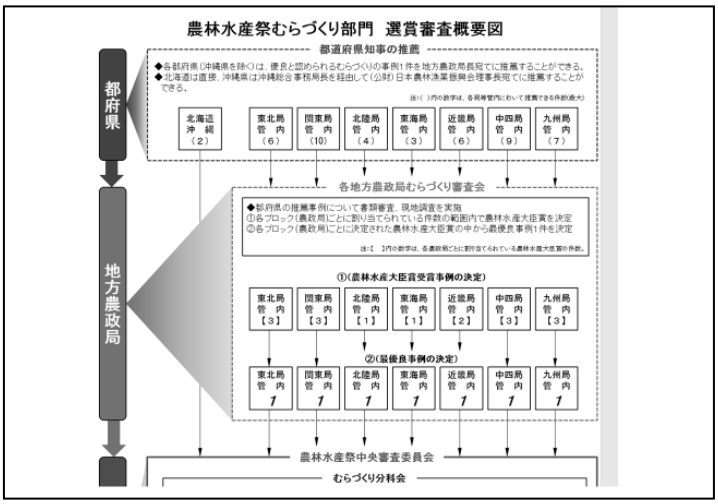
「若者の目もキラキラ」という、どちらかといえば、皆さんの心に訴えるような標題になったのは、今日、パネラーに参加していただいているＮＨＫの畠山委員からのご提案があったからと聞いています。

私のほうで、畠山委員からいただいた案に１つだけ手直しをさせていただいた点が、最初いただいた案が「若者の目がキラキラ」となっていたのですが、「若者の目もキラキラ」というように一文字だけ変えさせていただきました。これは、高根フロンティアクラブの取組が、若者だけではなく、全ての世代にわたる活躍である点が評価されたことをよりはっきりさせるためです。

それでは、次に農林水産祭むらづくり部門選賞審査の方法の概略を申し上げます。

まず都道府県から優良と認められるむらづくり事例が１件ずつ各地方農政局に推薦され、それぞれの地方農政局でむらづくり審査会が開催され、その中で農林水産大臣賞が選ばれ

ます。その農林水産大臣賞を受賞した取組の中から、各農政局から１件ずつ最優良事例が選ばれます。これで各農政局から1事例ずつ選ばれることになり、７つの候補がそろいます。



それから、地方農政局がない地域があります。それが北海道と沖縄なのですが、北海道と沖縄からは直接、農政局を通さずに候補が１事例推薦されます。それで、各農政局から選ばれた事例が７つと、沖縄、北海道から選ばれた事例が１つ、合わせて８つがむらづくり分科会に推薦されてくることになります。

この８つの事例から、第１回むらづくり分科会において、各農政局や北海道・沖縄の担当者から、資料をいただいたり、プレゼンテーションをしていただいたものを審議して、３つの現地調査事例を選ばせていただきます。その３つの事例を現地調査させていただいた後、その中から第２回分科会で天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞を選定させていただく手順になっております。

現地調査のとき、例年であれば、直接現地にうかがって、皆さんからお話を聞いたり、取組の現場を見せていただいたりするのですが、今年度は新型コロナの影響で、全てリモート調査にさせていただいております。第１回分科会においても、各農政局からのプレゼンテーションもリモートで実施しました。現地調査のときも、質問を委員のほうから出させていただいて、それに動画でお答えいただくという方法を採りました。

そして、第２回分科会の後、10月６日に開催された第２回総会において、天皇杯以下三賞が正式決定されるという手続きで選賞手続きが進められました。こうして天皇杯に選ばれ

たのが、高根フロンティアクラブということとなります。

次に、選賞審査基準についてお話しします。

選賞審査基準

- むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
- むらづくりの合意形成の状況
- むらづくりの推進体制の整備・運営の状況
- むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況
- むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況

審査基準は、むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況、むらづくりの合意形成の状況、むらづくりの推進体制の整備・運営の状況、むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況、むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況、の５つです。この５つの選賞審査基準によって３つの現地調査事例を選定し、３つの事例から天皇杯以下三賞を決めていったのです。

令和２年度に農林水産祭むらづくり部門で受賞した事例の一覧と位置図を示しておきます。この中で、天皇杯を受賞したのが高根フロンティアクラブで、内閣総理大臣賞を受賞したのが宮城県七ヶ宿町の湯原集落協定で、日本農林漁業振興会長賞を受賞したのが奈良県五條市の農事組合法人ゆめ野山です。

ここで内閣総理大臣賞と日本農林漁業振興会長賞を受賞された２事例について、ごく簡単に紹介しておきます。宮城県の湯原集落協定の事例では、良食味米やソバ栽培により、集落協定の農地を守っていこうという取組です。それと地域内外からボランティアを募り、獣害対策や除雪に取り組んでいることが、その特徴としてあげられます。一方、奈良県の農事組合法人ゆめ野山事例は、５つの集落をまとめた営農組織が、ＩＣＴやドローンなどの最新技術を入れて、農地や農業水利施設の管理を一元的に行なっている点が特徴です。

それでは、高根フロンティアクラブの評価ポイントについて３点述べさせていただきます。

まず評価ポイント①ですが、先ほど紹介した５つの評価基準のうちでは、「自主的な努力と創意工夫／推進体制の整備・運営」が当てはまります。高根フロンティアクラブは、20～60歳代の地区の有志で構成された組織で、地域外への情報発信及び地域内外の交流促進、地域内の他組織や地域外の応援団と連携して地域活性化に取り組んでいます。また、フロンティアクラブの活動が刺激となって、さらに若手を中心とした「高根コミュニティラボわぁら」が立ち上げられ、むらづくり活動を展開しています。こうした取組が、「自主的な努力と創意工夫／推進体制の整備・運営」という基準で評価されました。

高根フロンティアクラブ　【評価ポイント①】

自主的な努力と創意工夫／推進体制の整備・運営

高根フロンティアクラブは、20～60歳代の地区の有志で構成された組織で、地域外への情報発信及び地域内外の交流促進、地区内の他組織や地域外の応援団と連携して地域活性化に取り組んでいる。また同クラブの活動が刺激となり、平成28年に40歳代以下の若手が「（一社）高根コミュニティラボわぁら」を立ち上げ、むらづくり活動を展開している。

伝統的結婚式　筆筒送り

遊休地へのヒマワリの播種

それから「地域農林漁業の振興／担い手の育成」という基準で評価されたのが評価ポイント②です。高根フロンティアクラブは、棚田の耕作状況調査を実施し、後継者育成や米づくりサポートなどの耕作支援と、直接販売や販路拡大の支援を行い、棚田米の販売や稲作サポートを組み合わせた準村民制度を目指して活動しています。それから、廃校を活用した農家レストランＩＲＯＲＩでは、地元産のそば粉100％の手打ちそばや、校舎内の加工場で生産したどぶろくなど、６次産業化にも取り組んでいます。さらに、東京の商店街とも交流しながら、高根の農産物の販路を拡大している点が高く評価されました。

高根フロンティアクラブ　【評価ポイント②】

地域農林漁業の振興／担い手の育成

棚田の耕作状況調査を実施し、後継者育成や米作りサポートなどの耕作支援と、直接販売の販路拡大支援を行い、棚田米の販売や稲作サポートを組み合わせた準村民制度を目指して活動している。また、廃校を活用した農家レストランＩＲＯＲＩでは、地元産そば粉100％の手打ちそばや、校舎内の加工場で生産したどぶろくなど６次産業化にも取り組んでいる。さらに、東京都墨田区の商店街との交流により、棚田米や新たに開発した特産品などを販売する高根物産展を開催している。

高根の棚田

農家レストランIRORI

そして「合意形成／豊かで住みやすい農山漁村の建設」という観点から評価されたのが、評価ポイント③です。

高根フロンティアクラブ　【評価ポイント③】
合意形成／豊かで住みやすい農山漁村の建設

地域の課題を整理し、10年後を見据えたたかねみらいづくりビジョンを策定し、ビジョンの柱の１つを新しい寄り合いづくりとした。また、空き家を整備・活用して、集落の人が手軽に集える場と機会を提供し、集落の子供の勉強や遊び場や、高齢者の介護予防としてのお茶のみ場づくりに意欲的に取り組んでいる。さらに、地域の担い手の増加につながる取組として、都市住民を対象に体験プログラムを企画・実施している。また、首都圏の大学生や企業と連携し、ブナ林・どんぐりの森づくりを行い、学生、社員やその家族が定期的に訪れるようなり、都市との新たな交流を創出している。

ゲストハウス瑞泉閣

高齢者のお茶のみ場

大学生との交流

地域の課題を整備し、10年後を見据えた「たかねみらいビジョン」を策定し、ビジョンの柱の一つを「新しい寄り合いづくり」としました。このような話し合いが非常に大切にされていることが大きな評価ポイントになっています。また、空き家を整備・活用して、集落の人が手軽に集える場や、子どもの遊び場、高齢者のお茶飲み場として提供したり、都市住民を対象とした体験プログラムを実施したり、大学や企業と連携して、ブナ林・どんぐりの森づくりを行い、都市住民との新たな交流を創出しているところも評価されています。

廃校や空き家の活用、遊休地や棚田の活用など、それぞれの取組も高い評価を受けましたが、とりわけ「みらいビジョンづくり」のような計画づくりや、「高根フロンティアクラブ」や、そこから派生した「コミュニティラボわぁら」といったような、各世代の目がキラキラとし、頑張れる推進体制が高く評価されたということです。

以上、選賞報告とさせていただきます。

○司会　福与先生、どうもありがとうございました。

続きまして、業績発表に移ります。

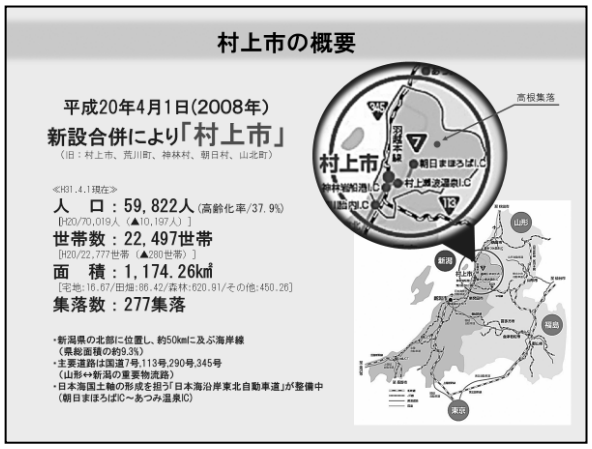
業績発表を、天皇杯受賞の高根フロンティアクラブ会長の鈴木様と事務局の能登谷様にお願いいたします。

【業績発表】高根フロンティアクラブ会長　鈴木　信之

皆さん、こんにちは。フロンティアクラブの鈴木と言います。よろしくお願いします。オンラインでのシンポジウムということで、非常に不慣れなところなのですが、よろしくお願いします。

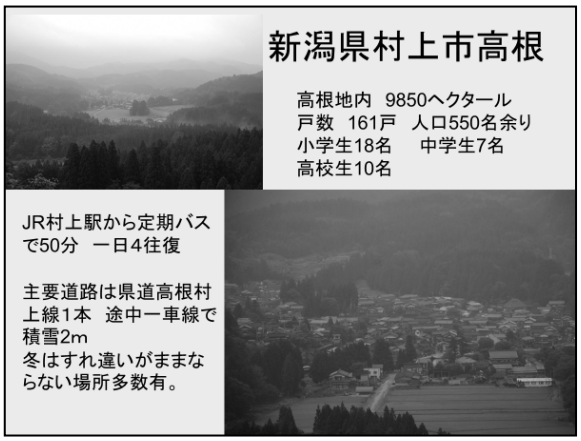
我々の地域を紹介したいと思います。

平成20年から村上市となって、村上市高根という集落になりまして、村上の様子はこのような形で、人口６万人を切っておりまして、集落数としては277集落のうちの１つの集落という状況です。



今回、令和２年度の天皇杯をいただきまして、集落全体で喜びにわきました。集落公民館のところに皆さんに来ていただいて、天皇杯を持っていただいたりしながら、このような形で子どもたちからお年寄りまで、皆さんが見に来ていただきまして、喜んでいただきました。写真は一部ですが、相当な方々が見に来られました。

村上市高根というところは、先ほど言ったように、村上市中心部から車で40分余り山奥に入ります。高根地内、集落は１万町歩。戸数にして161軒、人口550名余りが住んでおります。

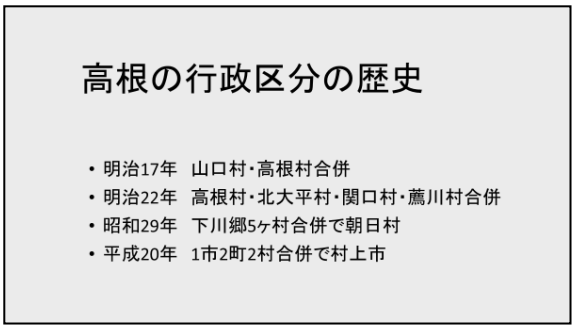


小学生、中学生、高校生ということで、このような人数になっております。

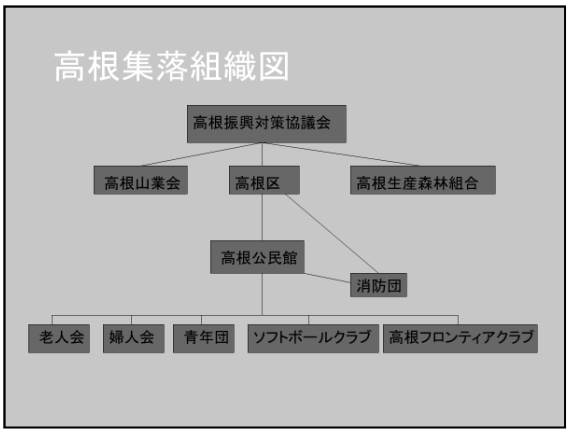
村上駅からも定期バスが１日４往復、一応通っておりますが、定期バスにはほとんど人は乗っていないのが実際です。

現在、我々の地域は、積雪が１メートル50センチ余りあります。私の家でも１メートル50センチぐらい。今年は、雪下ろしは１回程度で、例年であれば２回ほど雪下ろしをする集落です。

高根の行政区分は、歴史的には、明治17年の合併から始まって、昭和の大合併で旧朝日村になりまして、その後、平成20年に今の村上市に合併されて、村上市高根という集落になっております。



集落の組織ということになるのですが、当然、高根区が自治会の中心になります。ただ、先ほどお話ししたように、我々の集落は、山をたくさん抱えておりますので、山を管理する団体が３つほどあります。ここに載っているのは２つですが、高根生産森林組合、そして高根山業会と高根植林会というのが山を管理する団体です。これと高根区で一緒に部落の活性化を図ろうとして、高根振興対策協議会というものをつくっております。



高根区の下に高根公民館、その下に各種団体があり、老人会だったり、婦人会だったり、ソフトボールクラブ。この中の一つとして高根フロンティアクラブが存在しております。

高根区自体には、当然、区長さんを初め役員の方々がいらっしゃいます。ほかの集落と若干違うのは、集落として１名職員を雇っておりまして、集落の事務的なことは全てこちらでやっていただいている。高根区長さんは、そこに行って判子を押したりするという状況です。予算規模にして800万ぐらいの中で区の運営をやられています。その下に公民館がありまして、公民館の役員が、館長以下７名で、公民館の予算規模は280万円ぐらいです。

これは、細かな資料で、説明の時間はないのですが、集落のお金の流れということで、

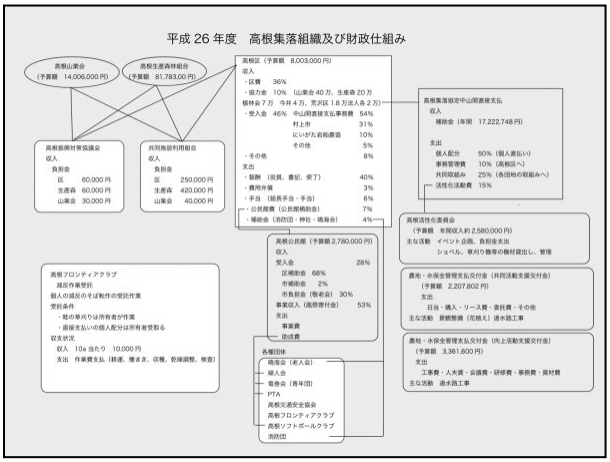
高根区のほうに生産森林組合などの協力金が入り、区費等々で運営されていまして、そこからまた公民館にお金が流れる形です。

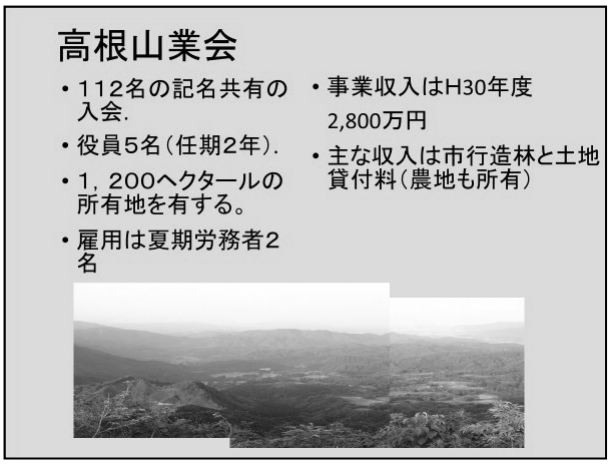
集落の運営としては、今、中山間直接支払の事務も高根区で行っておりますので、そちらのお金も結構大きなお金が今入っている状況です。先ほど言った山の会については、高根山業会、これは、112名記名共有の入会の山でありまして、こちらは役員が５名で、1,200haの山を有して、それを運営している状況です。

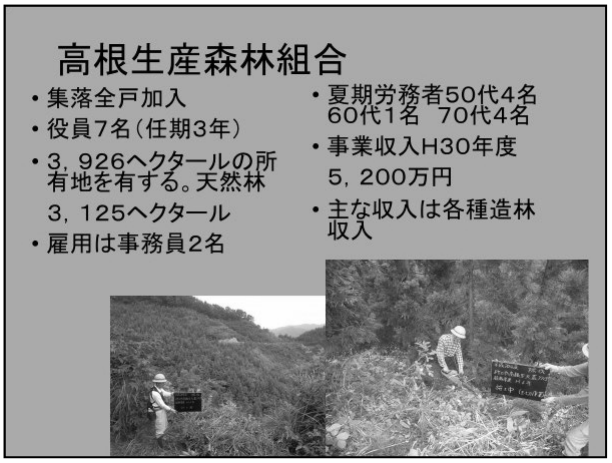
高根生産森林組合。これは、集落全戸加入。全戸といっても、新しく集落に来られた方は加入されていませんが、ほとんどの方が入っており、役員が７名で、4,000haほどの山を有して、それを運営しています。

雇用のほうは、今、事務員の２名が通年雇用で、あとは季節労働で、このような形で働いていらっしゃいます。一番景気のいい時代は、生産森林組合は、山で働く方々が30～40名いた時代もありましたが、現在はこのようなことです。

そういう中で、高根フロンティアクラブは平成８年の６月に有志で結成されました。30～40代の仲間で集落のこれからを考えていこうということで立ち上げまして、1年目は勉強会等々を行いながら、2000年に集落全体でワークショップをやって、集落の方向性を考えました。

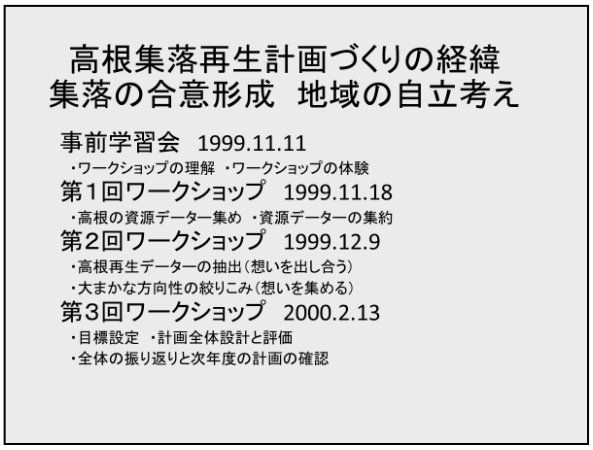






高根フロンティアクラブの仕事
（高根集落のまちづくり）
Ｈ８年６月(１９９６年)　結成

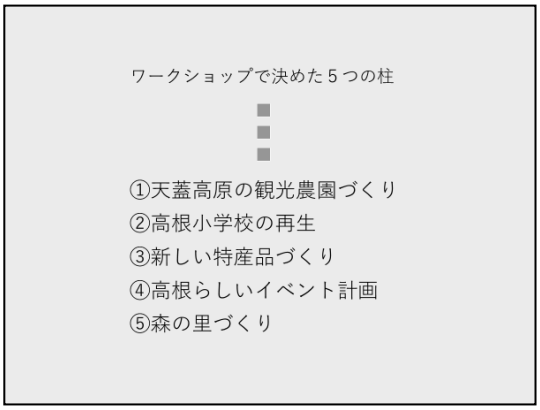
これがその当時のワークショップの内容です。1999年の秋口から事前学習会をやって、当時、ワークショップという言葉自体知らない我々の集落でしたが、とりあえず集まって話し合おうという形で始めました。そして、１回、２回、３回と地域の意見を集めたり、それをどのようにして使えるのか考えたりということでやっております。



こんな形で、我々の集落だけではなくて、新潟県の方々だったり、地域の方々、よその方々にも協力していただきながら、集落の方々で話し合い、そして発表会をやったりというような形で３回ほどやりました。

いろいろなものを見つけたり、大きな地図をつくって、そこにガリバーマップを作成しました。集落内だけでは集落のことが見えない部分もあるだろうということもありまして、2000年の５月には、集落外の方々にも来ていただき、まち歩きをしながら、集落の宝物を探してもらいました。この時は140～150名の方が参加されてまち歩きをしていただきまして、

最終的に、ワークショップの後、シンポジウムも行ったのですが、その中で５本の柱ということで、天蓋高原の観光農園づくり。天蓋高原の遊休農地になった部分をどのようにして使うかという話になりましたし、２番目が、高根小学校の再生ということで、2000年にちょうど我々の集落にあった学校が廃校になることが決まっていましたので、それをどうにか活用できないかということが１つ。それから、新しい特産品。集落の特産品をつくろうということが１つ。それから、人を呼び込むためのイベントを計画しようということが１つ。それから、大きな森があるので、それを活用することができないかということが１つ。この５本の柱の中でいろいろな活動をしてきました。



これが観光農園計画で、遊休農地になったところを一番初めにやったことがひまわり畑の造成でした。ここは非常に景観がいい場所だったので、ひまわりを植えて、ひまわりが満開になったときにイベントをやろうという思いもあってひまわりを植えました。当時、朝日村の花がひまわりだったこともあって、ひまわりに決めて植えたわけです。朝早くから会員が石拾いをしたり、自分のトラクターを持ってきて耕転したりして、開墾してきました。

そしてまたもう一つが高根らしいイベント計画ということで、最初はひまわりが咲いたときに大きなイベントをやったわけですが、その後は四季を通じていろいろなイベントをやっていこうといいうことで、冬には雪中貯蔵体験で、雪を利用したイベントを行いました。

それから、先ほど話したように、夏はひまわり畑で天蓋高原夏祭りを開催しまして、ビオトープ等も整備しながらイベントをやりました。秋になると収穫祭で、今現在は新そば祭りを開催しております。

このような形で、季節を来られた方々と共有しながら、いろいろな楽しみを、集落の人たちも楽しむし、来られた方も楽しむというイベントを開催しております。

我々としては、一番大きなお金を使ったのは廃校利用の計画です。平成14年から計画づくりを始めまして、平成15年には実際に廃校を活用すると決めまして、行政とも相談しながら、最終的に我々が平成14年に計画づくりをした中で、高根の食の発信地にしようということで、食堂になりました。

平成15年から、お金は新潟県から200万円ほど、集落から250万円ほど。250万円については出資という形でお金を集めて、450万円の中で改修にかかりました。

450万円、非常に大きなお金ではあったのですが、古い校舎であったし、下水道等も引かれていませんでしたので、お金も結構かかるということで、自分たちでできる部分は自分たちでやろうということで、仕事が終わった後、校舎の板の張り替えだったり、掃除だったりを男性軍はやりました。女性軍は、メニューの開発ということで寄り集まって、どんなメニューができるかの

話し合いをしています。

自分たちだけで考えていてもということで、講師も呼んだり、視察を繰り返しながら進めてきました。改修と同時並行で進めております。

最終的に平成15年10月に食堂ＩＲＯＲＩが開店しました。当初、集落の方々にも、この地域に食堂をつくって誰が来るのだ。猿でも来るか（笑）というような話もあったわけですが、開いてみると、非常に多くの方々が来ていただいております。

このような形で地域のお母さん方が料理をしながら、来られた方々に食を提供するということで、平成15年の秋から始めたわけです。冬場は我々のほうは休んでおりまして、また春からになりますが、４月の中旬から11月いっぱいの土日、祝祭日で、今、2,500～3,000人ぐらいの方々が訪れてくださっております。昨年度はコロナの関係もありまして７月からの開店になりましたが、それでもいろいろな方々に来ていただているような状況です。

そんなことで、地元で採取されたものを地域の中でお金に変えて、地域の中で共有するというような仕組みとしては、ある程度我々の意図するところだったのかなと思っております。

そのほかにも、校舎を使って体験ということで、そば打ち体験だったり、ピザづくり体験で受け入れをしていまして、こちらのほうは年間大体300人訪れてくれております。現在、ピザづくり体験のほうが多いのですが、そば打ちのほうも何人か来られて、地域の子どもたちと触れ合って、廃校になった学校も子どもたちが戻ってきたという感

めでたく開店
平成１５年１０月
（２００３年）

地元で採取される物をお金に変える。
→地域でお金を共有する！

体験受け入れ

昔のおもちゃづくり体験

ソバ打ち体験

ピザづくり体験

じになっています。

このような体験を通じて文化を共有するという形で、いろいろな子どもたちと一緒にいろいろな体験をやって、我々も非常に喜んでいる状況です。

食堂を開店したおかげで、集落の農地は80haぐらいなのですが、そのうちの10haはそばの転作です。多分ＩＲＯＲＩがなければ、そばを転作として受け入れはしなかったのですが、ＩＲＯＲＩがあることもあって、今現在、転作はそばという形でフロンティアクラブで請け負って、少しでも遊休農地にならないように、そばをつくっている状況です。

あとは森づくりですが、大きな森があって、植林された森もたくさんあるのですが、フロンティアクラブの力で木を高く売ることがなかなかできないところもありますので、我々としては交流の場所として使っていこうとして、森の中に遊歩道をつくったりしております。

そういう中で、企業との連携ということで、今現在は、ＴＯＴＯさんの「どんぐりの森づくり」ということで来られているＣＳＲの受け入れだったり、今現在は、キヤノンさんは来られていないのですが、ＮＰＯ法人、共存の森がブナの植樹をしたいということで、いろいろな交流の場所として活用している状況になっております。

その中で日本山村会議というものを開催しながら、全国の皆さんと交流も進めてきました。

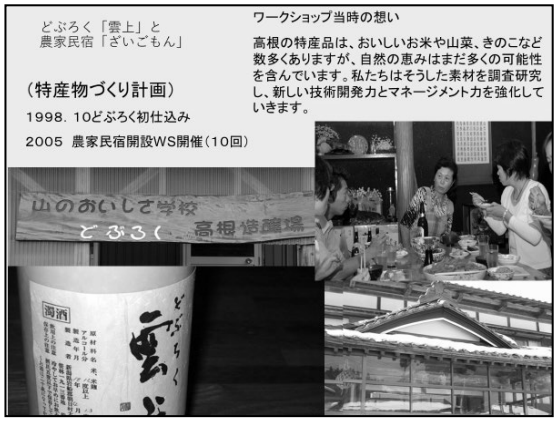
集落の中に、いろいろな方々が来られても宿泊施設もないこともありましたので、このときには民泊実験と。どこか民宿が開設できないかなということのワークショップもやり、山村会議のときに民泊実験ということで、来られた方々を新しい試みとして集落の人たちのところに泊めていただいて、どのようにして民宿ができていくかということを考えています。今現在は、農家民宿が１軒、ゲストハウス１軒で、宿泊施設もできて、来られた方が泊まれるようになっている状況です。

そんな形でいろいろな方々と交流をして、感動・恵みを皆さんと共有しながら、集落の方々も楽しんでいる状況になります。

最後の５番目の特産品づくりとしては、今現在はどぶろくの製造で、平成17年から仕込みが始まりました。これは、どぶろく特区に指定していただきまして、食堂ＩＲＯＲＩのＰＲも含めてこの製造が始まったということで、棚田でつくられたお米を利用して、今現在、どぶろくも製造されています。

こんな形で廃校になった教室を利用しながら、どぶろくも製造しております。

今は、赤、白ということでやっています。

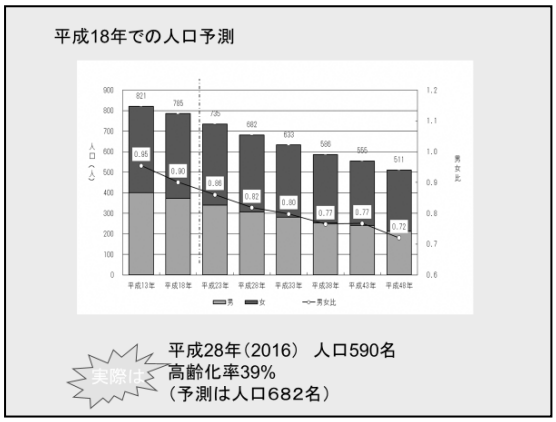


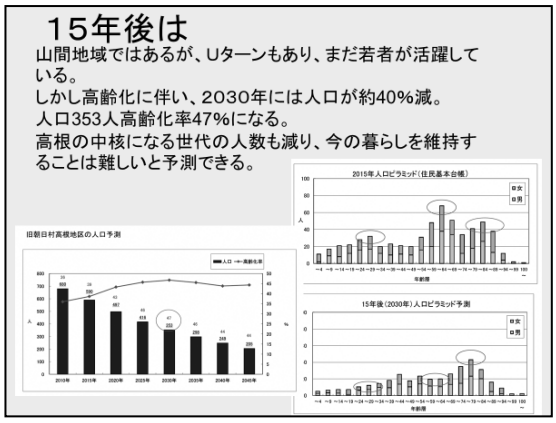
いろいろ話はしたのですが、10周年、20周年ということで、我々も年代を重ねて、私が事務局として最初にやったときは34～35歳の年齢だったのですが、今現在、60歳で、会員自体も高齢化をしている中で、今後どうしていこうかなという話し合いもなされてきました。

せっかく天皇杯はいただいたのですが、やはり人口減は抑えられなくて、平成18年当時はこのような予想だったのですが、それをはるかに超える人口減という状況になっております。

Ｕターンはあるのですが、Ｕターンの数よりも人口が減る数のほうが多くて、今後の予測をすれば、2030年には今の人口の40％減という予想も立っておりますが、多分40％以上に減るのかなとは思っております。

そういう中で、2000年にワークショップをした中で課題があったわけですが、その後の20年の中で変わった課題をこれからもう一度みんなで考えていこうということで、新しい仲間を入れていこうと考えております。

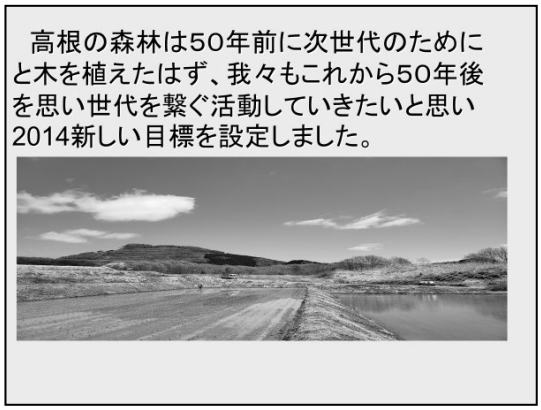




高根の森林は、50年前に次の世代のために我々の先輩が植えたはずなのですが、我々も50年後のことを考えた目標設定をしようということで、2014年に目標を設定しました。

そのときのワークショップをした様子です。

最終的に2014年に新しい柱ということで、今の時代に即したコミュニティづくりの仕掛けとプログラムをつくっていこう。それから、高根の暮らしの体験をしてもらって、移住者もふやしていこう。あとは、それを支えるために売る仕組みもつくっていこう。この３本の柱の中で、2014年以降は少しずつ続けているという状況です。



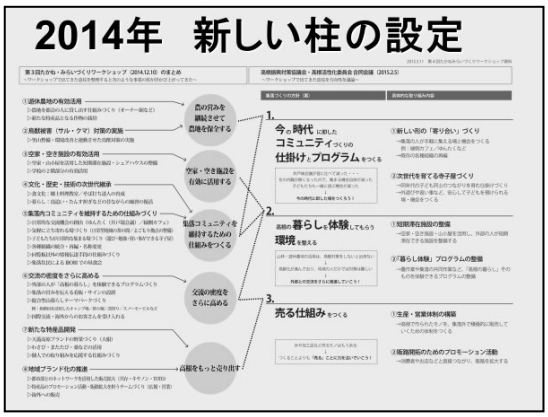
この後は能登谷のほうから話をしてくれる部分ですが、一応、写真だけあったので、次、お願いします。

売る仕組みということで、墨田区のほうに出ております。

このような空き家で新しいコミュニティをつくっていこうということで活動しています。この辺は能登谷のほうから出ると思います。

これもゲストハウスということで、若い人たちが空き家をリノベーションしてということで、今、活動しているというような状況になります。

私のほうからは、このようなことで事例の紹介をさせていただきました。あとは能登谷のほうから現在の新しい活動を紹介していただきます。お願いします。


2014年　新しい柱の設定
第3回たかも・みらいづくりワークショップ（2014.12.16）のまとめ
～ワークショップで出てきた意見を整理するためのような分科会の取り組みの中ってまた～
高根開発対策協議会・高根活性化委員会 合同会議（2015.2.5）
～ワークショップで出てきた意見を効果的な議論～
集落づくりの方針（案）
意見の反映（組み内容）
①遊休農地の有効活用
②鳥獣被害（サル・クマ）対策の実施
③空家・空き施設の有効活用
④文化・歴史・技術の次世代継承
⑤集落内コミュニティを維持するための仕組みづくり
⑥交流の密度をさらに高める
⑦新たな特産品開発
⑧地域ブランド化の推進
農の営みを継続させて農地を保全する
空家・空き施設を有効に活用する
集落コミュニティを維持するための仕組みをつくる
交流の密度をさらに高める
高根をもっと売り出す
1.
今の時代（に対応した）コミュニティ（づくりの）仕掛け（プログラム）をつくる
①新しい形の「寄り合い」づくり
②次世代を育てる仕子座づくり
2.
高根の暮らし（を）体験（してもらう）環境を整える
①短期滞在施設の整備
②「暮らし体験」プログラムの整備
3.
売る仕組みをつくる
①生産・営業体制の構築
②販路開拓のためのプロモーション活動

売る仕組み

時代に合ったコミニティ

暮らし体験

【業績発表】高根フロンティアクラブ事務局員　能登谷　愛貴

ここからは、私、能登谷愛貴が活動のご紹介をさせていただきたいと思います。私は、高根フロンティアクラブの役員をしながら、一般社団法人高根コミュニティラボわぁらという団体の事務局を務めております。

私は神奈川県の出身なのですが、先ほどの紹介にありましたフロンティアクラブの森の里づくり計画の一つの活動として受け入れてもらっていましたＮＰＯ共存の森ネットワークの取組で、学生時代から６年間高根に通わせてもらって、高根の温かさに魅了されて移住した一人です。早いもので来月になれば、私が高根暮らしを初めて９年になります。人生を変えてもらったきっかけがフロンティアクラブでもあり、心の豊かさを与えてくれる高根に何か恩返しをしたいという思いで、今、活動をしております。

ここからは、フロンティアクラブ中心のメンバーの子ども世代である若者たちが立ち上げた一般社団法人高根コミュニティラボわぁらという団体の活動を少しご紹介させていただきます。

高根フロンティアクラブの活動が始まったのは25年前ですが、そのころとは高根が抱える課題が大きく変わってきております。そして、目に見える形で暮らしへの影響が出てきています。人口減少・少子高齢化の影響で行事は廃止されたり縮小していますし、空き家も増加し、倒壊の危険がある建物も出てくるなど、管理の問題があります。農林業の担い手不足もとても深刻な状況です。

そんな中で、このような大きな課題を目の前にして、自分たちに何ができるのだろうかと考えたときに、20年先に明るい未来をつくるためにも、自分たち若い世代が未来を描いて、わくわくする取組をふやしていって、地域課題と向き合って、高根の未来を自分たちの手でつくっていこうということで、20代から40代の世代が中心になって、2016年、５年前に一般社団法人高根コミュニティラボわぁらという団体を立ち上げました。

この「わぁら」というのは、高根の方言で「私たち」という意味がありまして、みんなで一丸となって高根の未来のために取り組んでいきたいという思いを込めました。

高根が好きでUターンしている若者も多くおりまして、多世代同居の家庭に地域外から嫁いできてくれるお嫁さんたちもたくさんいます。そうした、いろんな人たちの目線を大事にしながら、ふるさと高根の暮らしを子どもたちのためにつなげていきたい。子どもたちにずっと高根のことを好きでいてほしいという思いもありました。

その思いを実現するために、事業で本気で取り組んでいくためには、法人化をして、地域経営を考えながら活動を展開していく必要があるというふうに考えまして、高根フロンティアクラブにも支援をしていただきながら、「高根のために」という大きな目標を同じくした別団体として活動を始めました。

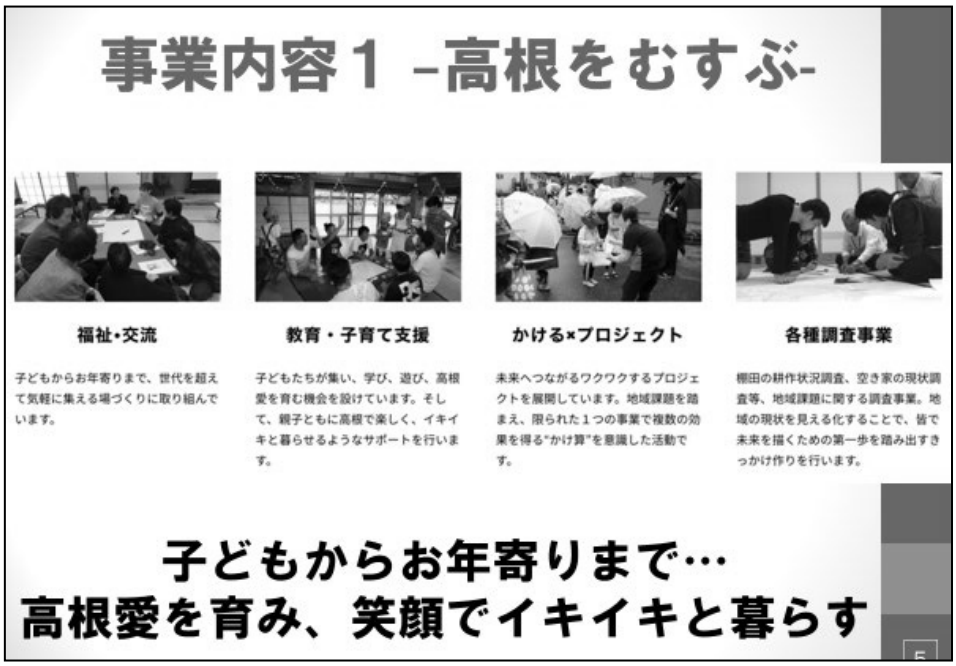
まず最初に取り組んだのは、大きな課題になっていた空き家対策の一つとして、築90年になる建物をみんなでリノベーションしました。フロンティアクラブの方やその活動でつながりのあった地域外の学生さん、企業の取組で高根を訪れていた方など、多くの人たちの協力を得ながら、集落内の大工さんとか左官屋さんに、壁の塗り方、襖の張り替えの方法などを習いながら、見違えるような建物になりました。

ここを活用しての活動は、介護予防の場から始まって、その後、子どもたちの学び場など、高根の人が気軽に歩いていける拠点として整備をしました。

あわせて、地域外の人が気軽に滞在できるように、ゲストハウス瑞泉閣として宿泊業も開始して、地域内外から多様な人が集う拠点『瑞泉閣』が誕生しました。

今、活動５年目を迎えて実施している事業は、大きく分けて２つあります。

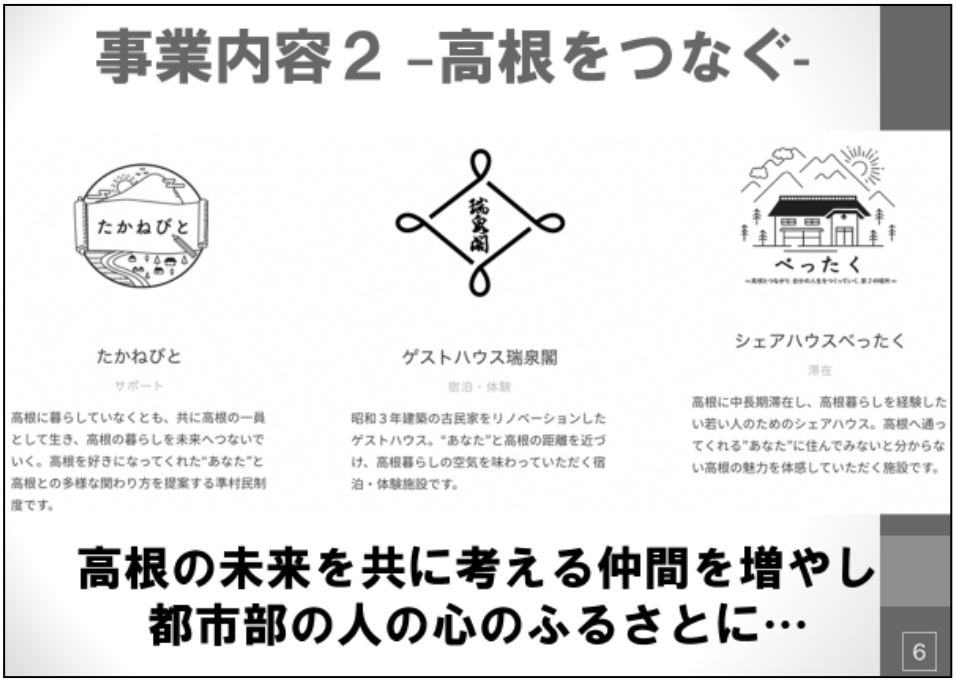
１つ目の高根の中の結びつきを強くするという事業では、高齢者の集いの場、子どもたちの学び場、また、地域課題を意識したプロジェクトの実施、空き家調査、棚田調査など、活動の裏づけとなる調査研究を行っております。



こうした拠点ができたことで、子どもやお年寄りを見守る機会を設けることもできていますし、そこに若者たちが集まって地域のことを学んだり、未来について考える場にもなっています。

そして、高根に暮らす人だけではなくて、地域外から高根を訪れてくれる学生さんたちや、ゲストハウス宿泊客の方など、多くの都市部に暮らす人たちも私たちの取組を支えて応援してくださる、高根にとってなくてはならない存在です。

そこで、事業の２つ目は、高根の外をつなぐ活動です。高根を心のふるさとのように思って応援してくれる人たちをつないで、準村民としてともに汗を流し笑い会える仲間をつ



くる会員制度「たかねびと」。気軽に高根で高根の人との出会いを楽しめる宿泊施設「ゲストハウス瑞泉閣」。それから、高根に中長期滞在しながら、高根暮らしを経験できる「シェアハウスべったく」を運営しております。

こうした事業を実施する中で生まれているのは、高根に暮らす子どもたちが自転車でフラッと寄れる遊び場。お年寄りが押し車を押して集まってお茶飲みができる集いの場。地域外のお客さんとの交流を深め、高根でやりたいことに挑戦し、活躍する場です。

また、私たちの活動において、どんな事業も高根集落で高根にあるものを活用しながら実施しています。自然、伝統、施設、食、人材など、地域に眠っているものにスポットを当てまして、若者のアイデアで魅力ある形にして発信することで、高根への誇りと愛着を育んで、可能性が広がっていくというふうに考えています。

コロナ禍で外出が難しくなった昨年のゴールデンウィークには、廃校になった学校の校庭にフロンティアクラブがつくったピザ窯があるのですが、そちらを活用して集落内へのピザのデリバリーサービスを実施いたしました。外食気分でおいしいものを味わって、笑顔になって元気に過ごすことが一番の感染対策だというふうに考えたプロジェクトです。例年、子どもたちの体験活動で毎週末にぎわっているピザ窯を久しぶりに稼働させて、100枚を超えるピザと笑顔を各家庭にお届けいたしました。

毎年、さまざまな活動を行っていますが、どんなプロジェクトを行うときでも大事にしていることがあります。フロンティアもわぁらも専従の社員は１人もいなくて、全員が本業を抱えながらボランティアのような形で動いております。そのため、限られた人材、お金、時間を最大限生かすことを念頭に置きながら、１つの事業を行うときにいろいろな要素を掛け合わせて成果を得ることを常に考えています。

例えば、左下の写真にありますクリスマスのイベントでは、瑞泉閣で行う婚活イベントとして、地域内外から集まった参加者の人たちに全員サンタクロースになってもらって、集落内全戸を周り、プレゼントを届けてくるという取組を行いました。これは、子育て支援や高齢者見守り、婚活、集落の点検、人材育成などを兼ねて実施しております。

昨年については、子どもや孫、親戚の帰省が難しかったこともあって、フロンティアクラブにもご協力をいただいて、高根を離れたご家族、ご親戚にこっそり連絡をとって、サプライズでお家の方へのクリスマスプレゼントを届けるという取組を行いました。ふるさと高根を思うたくさんの方のご協力を得て、200個を超えるカードやプレゼントを各家庭に配布することができて、皆さんの寂しさを吹き飛ばして心を温めるのと同時に、高根に暮らす方にもし何かあったときとか、今後、万が一空き家になったときのためにも、高根を離れたご家族と連絡をとり続けるきっかけをつくることができました。

このように、高根の今、そして未来のために必要とされることは、分野を問わず、何でもチャレンジしてみる。まずやってみるという姿勢を大切にしながら、住民の数をふやすだけではなくて、人が交わる密度を高めることを目標に、わぁらは活動をしております。

フロンティアクラブもわぁらも、世代を超えて、それぞれの得意分野を生かしながら、高根を愛する思いで一つになっています。高根内の人同士も、高根の外の人たちも、できる範囲で活動にかかわってもらうことで、足し算ではなくて掛け算で高根の中に活力が生

まれていくということを実感しておりますし、高根流の生き方を子どもたちや孫たちの代につないでいくことになると信じて、今、活動を行っております。

親世代であるフロンティアクラブの大きな背中を追いかけながら、ともにつくり上げていく高根のわくわくするような未来に期待を寄せまして、私からの活動紹介とさせていただきます。

以上です。ありがとうございました。

○司会　能登谷様、ありがとうございました。

ここで10分ほど休憩をとりたいと思います。これまでの２件のご報告に質問などあろうかと思います。ご質問は、オンラインのチャットで記入していただくようにお願いいたします。パネルディスカッションの中で整理してお答えをいただくようにいたします。

それでは、15時15分の再開といたします。それまでにお戻りいただくようにお願いいたします。

（　休　憩　）

○司会　それでは、これからは、パネルディスカッションでございます。進行は、コーディネーターとして福与先生にお願いいたします。

【パネルディカッション】コーディネーター農林水産祭中央審査委員会 むらづくり分科会主査　福与　徳文

○福与（コーディネーター）　では、私のほうでコーディネートさせていただきながら、パネルディスカッションを進めます。

改めまして、むらづくり分科会の主査を務めさせていただきました、茨城大学農学部の福与と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

パネルディスカッションに入る前に、パネリストの皆様のご紹介をさせていただきます。

まず、高根フロンティアクラブの方々です。先ほど報告していただいた鈴木さんと能登谷さんのお２人に参加していただきます。

それから、冒頭に挨拶いただきました、村上市の高橋市長です。よろしくお願いいたします。

そして、新たにここから登場していただくのが、新潟大学工学部の寺尾仁先生です。寺

尾先生、一言お願いします。

○寺尾（コメンテーター）　新潟大学の寺尾です。どうぞよろしくお願いします。新潟大学で都市計画とかまちづくり、地域づくりを専攻しております。高根とのおつき合いについては、後ほどお話しします。どうぞよろしくお願いいたします。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。高根とのおつき合いがある地元の大学の先生に参加していただき、大変心強く思います。どうぞよろしくお願いします。

それから５人目は、農林水産祭中央審査会委員で、むらづくり分科会の委員を務めておられます、ＮＨＫのエグゼクティブアナウンサーの畠山さんです。畠山さん、一言お願いします。

○畠山（コメンテーター）　よろしくお願いいたします。夜７時のニュースであるとか、報道畑を歩いていたのですが、もともとは北海道の帯広に最初赴任したことが、農業、地域起こしにかかわるきっかけになっておりまして、当時、大分県の平松知事が１村１品運動をされたころでした。十勝でも随分、大酪農地帯、畑作地帯の農村地帯でいろいろな試みをしたのですが、成功例も失敗例もたくさん見てきました。私は行政の専門家でも農家でもありません。第三者からその地域に行ってみたいかどうかという観点で、今回、むらづくりのほうをいろいろ審査させていただきました。今日もそういう立場でコメントしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。

それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

まず、天皇杯を受賞されて、地元は何か変わったことがありますでしょうか。鈴木さん、能登谷さん、それぞれお話を伺いたいと思います。まず鈴木さん、よろしくお願いします。

○鈴木（業績発表者）　我々、天皇杯をいただきまして、非常にありがたかったです。一応今日は、皆さんに見せるために天皇杯もお持ちしました。こんな形でいただきました。非常に重い天皇杯でした。東京から持ってくるのも結構大変でしたが、今現在も盗まれないか、不安を抱えながら持っております。

我々の集落で天皇杯をもらったということで、集落も当然非常に喜んでいます。会員も当然非常に喜んでおりました。我々も最初、天皇杯自体というか、この表彰自体をあまり知らずに、何となくどんどんと上のほうにいって、最終的に天皇杯をいただいたということで、集落の方々にもお話をしたのですが、天皇杯自体をあまり知らなかったというのが実際のところです（笑）。

でも、先ほどお話ししたように、集落公民館に飾らせていただいて、集落の方々に見に来てくれと言ったら、やはり皆さん喜んで見に来られて、それをお持ちになったり、写真を撮ったりということで、非常に喜んでおります。

ただ、今回、コロナ禍の中で、我々も祝賀会も当然考えたのですが、なかなかそれができずに、今現在、ジレンマを抱えて、いつ天皇杯の祝賀会をやろうか、常々考えているような状況にあります。

我々の会も、さっき話したように、高齢化が進んでくる中で、少しずつ気持ち的に落ち込んできていた部分も当然ありました。そういう中でこのような大きな賞をいただいたことは、今後の活動に非常に有意義だったなと今現在も思っていますし、多分、そのおかげで県知事に表敬訪問させていただいたり、当然、村上市長、村上地域振興局長、こういうところにも表敬訪問させていただいて、我々としても大きなつながりをつくらせていただいたということでは、非常にありがたかったです。そんなところです。

○福与（コーディネーター）　能登谷さん、いかがでしょうか。

○能登谷（業績発表者）　鈴木が言っていたとおり、この賞のすごさというか、すばらしさというのを認識していなくて、天皇杯を実際にいただいて、この手に持って初めてその重みを実感したなという感じでした。集落の皆さんも、ワーッとわき上がるような喜びというよりも、みんな、これまでの活動を振り返って、頑張ってきてよかったねとかみしめるような喜びの雰囲気という感じを受けています。

あと、フロンティアクラブの会員の人たちだけではなくて、地域の人たちですとか、特に子どもたちが実際に天皇杯に触れて、感動を分かち合うことができたというのは、すごくうれしいことだなというふうに思っています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。それでは、高根フロンティアクラブについてのディスカッションに移らせていただきます。

そもそも高根フロンティアクラブを立ち上げた、その理由を最初にお聞きしたいと思います。というのは、全国の他地域の事例を見ても、基本的にはその地域の自治組織をベースにして、自治組織が母体になっているような活動組織が結構多いと思いますが、高根の場合、高根フロンティアクラブを地域づくりのための組織として別に立ち上げたと捉えることができるわけです。

さらに、空き家の活用とか、都市農村交流を担う組織として「高根コミュニティラボわぁら」を別に立ち上げられております。このように、集落の自治組織とは別の組織を立ち

上げる必要性が何かあったのではないか。意地悪く言うと、もともとの自治組織では限界があったのではないかと思うのですが、その点に関して、会長さんも当時は若手だったわけですが、「地域の若手としてどんな思いで立ち上げたのか」をまずお話しいただきたいと思います。

○鈴木（業績発表者）　平成８年の６月に立ち上げたわけですが、私が４代目の会長になります。１代目の会長、２代目の会長、３代目の会長、そして私が、事務局からはい上がって、やっと20年目にして会長になりましたと言っているのですが（笑）、その当時、35～36歳でした。

集落の中は、我々の集落、その当時は、空き家もない集落ということで、威張ってというか、そんな感じでいたのですが、林業が中心の集落でもあって、生産森林組合が30～40名の方々が働いていた時代から、徐々に地域の中で働く人も少なくなってきたり、林業のほうも経営的にも大変になってくる中で、今の時代から、我々集落のことを考えて、自分たちが集落の経営をすることになったときのためにいろいろな勉強会をしようということが一つの大きな柱でした。だから、何か我々がすぐできるというような思いではなくて、集落を勉強して、その時代になったときに集落をどういうふうな形でつくっていくか考えていこうというのが、始まりです。

その中で、いろいろな課題、その当時の課題が浮き彫りになってきまして、ひまわり畑とか、いろいろなことで活動はしてきたました。この前、天皇杯をいただいた関係もありまして、３代の会長でパネルディスカッションをさせていただいたのですが、そのときに初代の会長は、自分は高根が好きだと。その高根をどうにかしたいというような強い思いがあって、そういう中で初代の会長が必死になってフロンティアクラブを立ち上げていったというのが実際です。

先ほど言われたように、集落の中にはいろいろな団体がありました。青年団も当時は健在でしたし、婦人会、老人会、集落の中心である自治会、こういったものもありましたが、それは集落の中で、今で言う、コミュニティの中の活動が主でしたので、新しい展開というのがなかなかできなかった。それから、人々を呼び込むこともできなかったし、呼び込むような事業も当然やる団体でもなかったというのが１つあります。

そういう中で、フロンティアクラブのその後の活動の方向性としては、地域をＰＲしながら地域外の方々に来ていただいたりというような、交流を中心にした活動が中心になってきたというのが実際です。

そのような形で、今までフロンティアクラブがいろいろな方々と交流をして、いろいろな方々に来ていただけるような仕組みづくりをできたというのが、当初からの設立の思いから少しずつやってきたところだと思います。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。今のお話ですと、もともと高根の従来の組織は、林業がまだ盛んだったころの組織で、昔からの組織であり、ちょっと保守的な、新しいことをやるというよりは、内向きの組織で、地域外との交流のような新たな活動を行うのはなかなか難しかった。そこで、地域の若者たちが、自分たちが地域のリーダーになるときを見据えて、高根フロンティアクラブをまず勉強会として立ち上げていった。それが、地域づくりの組織としてどんどん発展して、今に至っているという理解でよろしいのでしょうか。

○鈴木（業績発表者）　そのとおりです。

○福与（コーディネーター）　それから、もう一つ気になったのは、勉強会とかかわることなのですが、高根フロンティアクラブの取組の中では、かなりワークショップを実施しています。活動の節目、節目で、ワークショップによる計画づくりが行われているのですが、これは非常に大切なことだと思うのです。これだけワークショップによる計画づくりが行われるためには、やはりファシリテーターを担えるような人材やノウハウが必要だと思います。高根フロンティアクラブの中に、例えば、民間のコンサルティング会社の人がいて、そういうノウハウを持っていた、あるいは、大学の教員とか研究機関の職員が外から入ってきた、あるいは自治体職員の中にワークショップのノウハウを持っている人がいた、ということが考えられますが、実際はどうだったのか、お教えいただきたいと思います。

○鈴木（業績発表者）　2000年のワークショップについては、最初、新潟県の「里創プラン」という事業があって、我々の会長もその委員として行かれていたときに、地元のデザインをやられている方がワークショップをいろいろ進めていた部分もあって、今後どうしようかという話の中で、その方が、じゃ、ワークショップでいろいろな計画づくりをしてみたらというようなお話でやったというのが実際です。そのワークショップ自体も、１年間、いろいろなことをやっていきまして、先ほど言ったような計画づくりができたというのでありました。

その後も結構いろいろなワークショップをやっていまして、民宿を開設するためのワークショップ、これについては、新潟県が主催してくれたものを我々が受け入れてやったり、

最後の2014年の今の３本の柱については、我々のほうから独自でお金をつくって、地域にあるＮＰＯに依頼してワークショップをコーディネートしていただいて、今の計画づくりをしたというのが実際です。だから、いろいろな方々が入っていただいたということですね。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

まだまだ聞きたいことはあるのですが、話を先に進めさせていただきたいと思います。

「高根コミュニティラボわぁら」が、高根フロンティアクラブと別につくられたわけですが、その経緯というか、その理由を教えていただきたいと思います。もう一つ確認させていただきたいのは、高根フロンティアクラブは法人格を持っていないと思ますが、「わぁら」は法人格をお持ちですよね。その点は、「わぁら」を別に立ち上げたことと関係あるのか、ないのか。能登谷さんからお話しいただければと思います。

○能登谷（業績発表者）　一番初め、もともと高根フロンティアクラブが活動をずっと続けてきていて、外からの方たちも受け入れたりだとか、お米の販売を始めたりだとか、いろいろ活動を拡大していく中で、フロンティアクラブが法人格をとって地域経営をしっかり考えていくのもいいじゃないかという案も出ていたのです。

ただ、これからというところを考えたときに、若い世代を巻き込んでいく必要があるということで、私たちももともと高根フロンティアクラブの方たちとのつながりが濃かったものですから、若い人たちはどんな意識なのだろうというのが気になっていました。実際、若い人たちとかかわるようになったときに、若い人たちも、フロンティアクラブの会員にはなっていないが、高根のことが大好きで、高根のために何かやりたいという思いをすごく強く持っているということがわかったのですね。

「なんで高根フロンティアクラブに入らないのだろう」となったときに、実は、今、高根フロンティアクラブの中心メンバーになっている方たちがお父さんたち世代、お母さんたち世代なので、お父さんと息子が同じ団体で一緒に活動するというのが、なかなか難しかったりだとか、あと、これから未来のために何かやっていこうとなると、法人格を取る必要があるなら、同じ目的を持った別団体をつくって、フロンティアクラブを大きくするというだけではなくて、活動のすそ野を広げていくというような取組の仕方もいいじゃないかということで、フロンティアクラブの皆さんとも相談しながら、新しい団体を立ち上げることにしました。

○福与（コーディネーター）　わかりました。

フロンティアクラブに参加していない若者たちも入れ込むと、そういうことですよね。

○能登谷（業績発表者）　そうですね。

○福与（コーディネーター）　地域外から入ってこられた能登谷さんから見て、地域のいろいろな世代のつながり方や、地域の方々の背中を見て学んだこととか、「ここ、いいなあ」と感じられた点をお話しいただければと思います。

○能登谷（業績発表者）　まず、私は、学生時代６年間高根に通ってから移住を決めているのですが、通っていた時期というのは、高根フロンティアクラブの皆さんに受け入れていただいていたので、おじさま方とのつながりが一番多かったのですね。その皆さんの一生懸命地域のために取り組んでいらっしゃる姿、それこそ目がキラキラとして生き生きと活動されている様子を私自身も見ていましたし、それを地域の若い人たちも一緒に見ていました。

加えて、フロンティアクラブの活動は、男性がもちろん前に出ることが多いのですが、下支えをしているのはお母さんたちでして、四季折々のイベントを開催するとなると、食の部分というのが欠かせないのですね。そこを担っているのはお母さんたちですし、高根を訪れる人たちの胃袋をお母さんたちががっちりとつかんでくれていて、フロンティアクラブの活動には欠かせない、大切な存在になっていたのではないかなと思っています。

あと、先ほど鈴木がご紹介したワークショップ、何回か開催しているのですが、そのワークショップにもフロンティアクラブの会員だけが集って話し合いをするのではなくて、地域の若い人たちも、青年団だったり、婦人会だったり、老人会だったり、それこそ幅広い世代の人たち、高根外の人たちも含めて、みんなで高根のことを考えていこうというワークショップを定期的に開いていましたので、そういったところがお互いの頑張っている姿を見せ合ったりだとか、思いを共有したりというところにつながっていたのではないかと思います。

○福与（コーディネーター）　畠山さん、ＮＨＫのラジオで取材をなさったと聞きました。先ほど「取材をしたくなるかどうか」が大きいとおっしゃっていましたが、いかがでしょうか。

○畠山（コメンテーター）　この地域は、かつて村上地区といいますと、日本海側の笹川流れの辺りは見たことがあったのです。ただ、そこから内陸のほうに入った高根というところに行ったことがなかったのですね。でも、そこの人たちの活動を聞くと、本当にみんな楽しそうにやっていらっしゃる。それは何なのだろうというふうにまず思ったのが原点

だったのですね。

そこにはすばらしい観光名所があるわけでもない。リゾートがあって、スキー場に駆けつけるとか、そういうような準備もない。でも、そこに、例えば、能登谷さんのような若い方々が入っていく。何が魅力なのかということが一番の疑問だったのです。

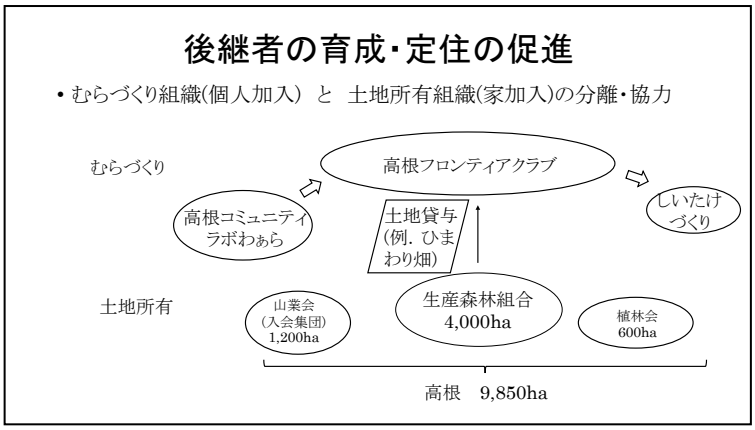
簡単に言いますと、僕がここの中で抱いたのは、あ、この人たち、課題解決型でむらを動かしていないなということなのですよ。単に好きなのです。本当に好きだと思いました。鈴木さんももちろんそうですし、初代会長さんもそうおっしゃっていた。高根が好きだとおっしゃったというふうに聞きましたが、自分たちのまちの宝は何だろうかで探してみたり、あるいは、能登谷さんたちがここに入ってきたきっかけというのが、人々の温かさだったりしたというふうにおっしゃっていたのですね。その中のエピソードの一個として、これは明かしていいのかな。能登谷さんのご主人のエピソードがあったのですが、たまたま引っ越そうかということで、その地域に住み始めたら、知らぬ間に家の前に電子レンジが置いてあったというのですよ。つまり、その人たちが、よそから来た人を、この人たち大変だろうから電子レンジの一個でもあげようかなという気持ちがあった。その気持ちが実は宝となっていて、いまだにずっとこの地域にみんなを思いやるということをすごく大切にしている。

それをもとにして、じゃ、この好きな村をどうしたらいいかね。課題解決ではなくて、楽しむためにはどうしたらいいのかなと考えた結果、課題が解決されている。そういう流れになっているのではないかなと思っています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。後でまた何かあったらお話しください。

それでは、お待たせしました。寺尾先生にお聞きします。どうして高根フロンティアクラブのような組織ができたのかという点を、地域を間近に見てこられた先生からお話しいただければと思います。

○寺尾（コメンテーター）



今まで多くの方がお話しされてきましたが、私も基本的には考えていることは同じです。まず、大きな特徴というのは、土地を所有して林業経営を行っている組織と、高根フロンティアクラブのような地域づくりをしている組織が全く――全くという言い方は失礼ですが、別にあるということです。高根は、先ほど鈴木さんのご紹介にもありましたが、集落面積が9,850haぐらいで、とても林地の多いところです。ただ、民有林の多くが、広い意味での共有の形をとっています。生産森林組合が大体4,000ha、入会集団の山業会が1,200ha、植林会が600haぐらい持っています。各々、自力造林や分収林経営をしています。これと別に、地域づくりの組織をつくっていくわけですが、高根フロンティアクラブに山業会が土地を貸します。これは、先ほど出てきたひまわり畑に最初は使うのですが、こういうふうに、土地所有をしている組織が、若い世代の組織に、空いている土地だから使っていいよというふうに、土地を簡単に――簡単かどうかはあれですが、貸してくれるという、ここが大きな一つの特徴かな。

高根には森林を共有する組織が多く、土地を持っている組織は、基本的に家単位で加入している組織。これに対して、むらづくりの高根フロンティアクラブは個人加入の組織と、きれいな対比をつくって全体として集落を運営しています。

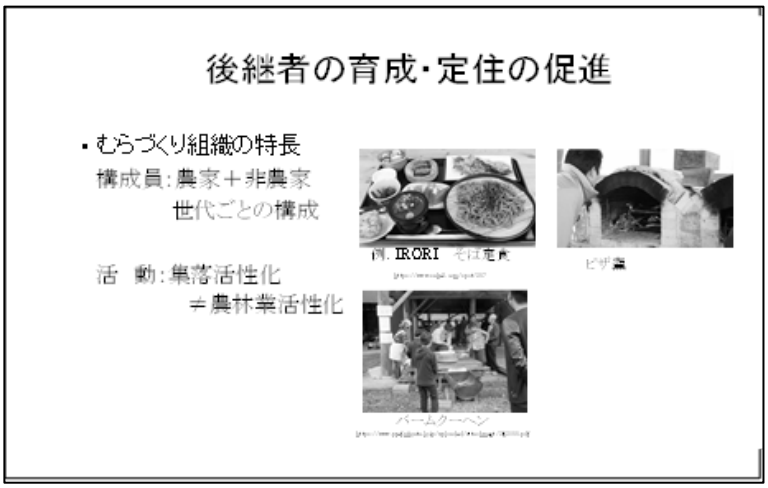
これは、鈴木さんのお話の中に出てこなかったのですが、鈴木さんたちよりもさらに前の世代は、シイタケづくりの組織を結成したと伺っています。

それから、このフロンティクラブの後に、今日、ご紹介がありました高根コミュニティラボ「わぁら」ができてくるということで、代々高根では、これがなぜかがよくわからないのですが、さまざまな事業を新たに起こしていく組織が、土地を所有している組織と別な形で結成されています。

ただ生産森林組合の名誉のために申し上げておきますが、高根生産森林組合は、今日、新潟県の方もいらっしゃるので私が間違っていたら、後で訂正していただきたいのですが、恐らく新潟県内で林業経営で黒字を出している、唯一か、もしかしたらほかに１つぐらいあるかもしれませんが、そのぐらいすぐれた生産森林組合です。先ほど鈴木さんからも、

鈴木さんが、高根に戻ってこられてフロンティアクラブの設立に関与されたころは、集落内で林業従事者が40名ぐらいおられたという話がでましたが、現在でも生産森林組合は木を切って黒字を出しております。

これが高根集落の基本的な構図です。したがって、むらづくりの組織が行う事業は、そのとき、そのときの経済社会事情に応じて、フロンティアクラブよりも前の時代では、おそらくシイタケをつくると、先ほど畠山さんから大分県の１村１品の話が出たように、高根では収益が上がるとお考えになってなさったと思います。能登谷さんたちが始めていらっしゃるコミュニティラボ「わぁら」は、どちらかというと、むらの中の課題を解決する方に向いているのは、今日の事情だと思います。



これはどういうことかというと、むらづくりの組織の特徴として、特にフロンティアクラブあたりから、農家だけではなくて非農家もあわせて一つのむらづくりの組織をつくっていることと、比較的世代ごとの構成をとっていることですね。世代が上がっていくと、生産森林組合の会員になったり、山業会の入会集団の一員になっていくので、若い世代でむらづくりをしていくということだと。

今日、農水省の企画の催物なので、少し刺激的に申しますと、フロンティアクラブにとっては、集落の活性化が大事なのですね。したがって、そばのように、これは転作奨励作物で高根でもだいぶつくるようになったわけですが、ＩＲＯＲＩのメニューの中にそば定食として上がってきます。しまし、能登谷さんの紹介にあったピザ窯は、高根で小麦をつくってそれから小麦粉をつくり、それをピザ・クラストにしているわけではありません。集落で楽しく暮らすことが大事で、どうしても集落のものを使わなきゃいけないという条件づけはしていないというのも、このむらづくり組織の特徴です。

新そばが獲れたときの味覚祭というイベントに行くと、バームクーヘンもつくっています。バームクーヘンを焼く時の芯にしている竹は、多分高根の中の竹林の竹を切ったものだと思いますが、小麦粉は高根産ではありません。このようなところが高根の比較的近くから見て気付く特徴と思うところです。

最初のお話はこのくらいにしておきます。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

今、先生から、もともとの地域の自治組織は、世帯単位に加入している土地所有者の組織（オーナーズクラブ）であったということです。やはり、新たな活動を行うためには、個人単位に加入し、しかも若く、世帯主ではない人たちが集う必要があったという点がはっきりしたと思います。

それで、高根フロンティアクラブは、どちらかと言えば、行政に頼らず、自分たち自身で地域づくりを進めてきたわけですが、とはいえ、色々な局面で、行政の力も借りるという部分はあったかと思います。こういった高根フロンティアクラブによる地域づくりを、行政の立場からどのようにお考えなのか、高橋市長からコメントをいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○高橋（コメンテーター）　まず、改めて、鈴木会長、能登谷さん、今回、天皇賞受賞、本当におめでとうございます。「見事だな」の一言に尽きるのですが、さっき、会長のコンテンツの中に、天皇杯を握りしめている子どもたちの姿がいっぱい載っていましたが、子どもたちの記憶の中に残るという、これが非常に重要だなというふうに実は感じています。

行政の立場からというお話でありますので、改めて申し上げますが、実は、先ほど来、2000年を前後して、ワークショップで平場の議論を積み上げる形で高根のまちづくりを進めてきたというお話、会長からもありますし、先生方からもそういったところに注視をしながらコメントをいただいているのですが、ちょうどその話のくだりの中にありました「里創プラン」、これは新潟県が実施した「ニューにいがた里創プラン」事業というやつで、それぞれ県事業として資金が地域に投入されて、それをベースにしてまちづくりをどう進めていこう。その手法として、中間支援組織。実は会長も構成員でありますが、私ども村上には、都岐沙羅パートナーズセンターという中間支援組織があります。そういった組織を中心にして、それぞれ地域が抱えている課題とか思いとか、そういうものをどういうふうな形で表に出して、可視化をしてみんなで整理をして具体的なものにつなげていこうかという取組、これが2000年を前後して始まったのですね。これが私自身としては大きな動き、ベースにあるものというふうに理解をしています。

それと同時に、これまで人口が減少する、地方の過疎化が進むという中で、農水省を初めとして、多くの公的な支援も入りました。ですから、ここのところをどうしっかりとま

ちづくりに入れ込んでコーディネートしていくのかというところ、それを中間支援組織の方々にコントロールをしていただいたというのがかなり大きかったのじゃないかなと私自身は過去を振り返ってそんなふうな思いがあります。

それと同時に、先ほど会長の高根の構図の中にもありました。行政区ごとに、区長さんだったり総代さんという重立ちがてっぺんにいて、それからそれぞれの世帯がピラミッド型の構成をしているのですが、とかくそういう形で物事は整理をされて決定をされて動いていくのですが、高根の場合は、その方々が若い世代の意見もしっかりと聞き入れたというのですかね。聞くことができる、そういう組織づくりができていたのだろうな。これが多分対外的に外からの人の入り込みもウエルカムという状態をつくり上げてきたというところに大きく実は寄与している。

これを実現できたのは何かというと、多分、今でも160世帯を超える550人の集落を構成しているのですが、それだけの規模の体力というのもあったのですね。一行政区で職員を雇用できる。職員がある意味その地域のコミュニティの行政分野を担う部分も、それをしっかりと、集落と行政とをきちんと連携をさせる仕組みに活躍できる雇用者として存在するという、これは希有な状態だったと思います。

こうした大きな幾つかの視点があって、今あるのだろうと思っているのですが、行政としてはそれを、どの地域にも、課題は違いますが、その中で高根の成功事例を入れると、この地域にとってはそれが効果があるよねということは幾つもあると思うので、そんなところをしっかりと連携をしながら、これからもご支援を申し上げていくことができれば、村上市全体のまちづくりを前に進めることができるのだろうと思っておりまして、大いに実は期待をしているところであります。

以上であります。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

重ねてお聞きして恐縮ですが、高根の事例から横展開していく点、学ぶべきものはいくつもあるとは思うのですが、市長さんから見て、「この点は横展開しやすい点だ」ということや、「この点は高根じゃないと無理だよ」ということがあると思うのですが、それに関して、もう少し詳しくお話ししていただければと思います。

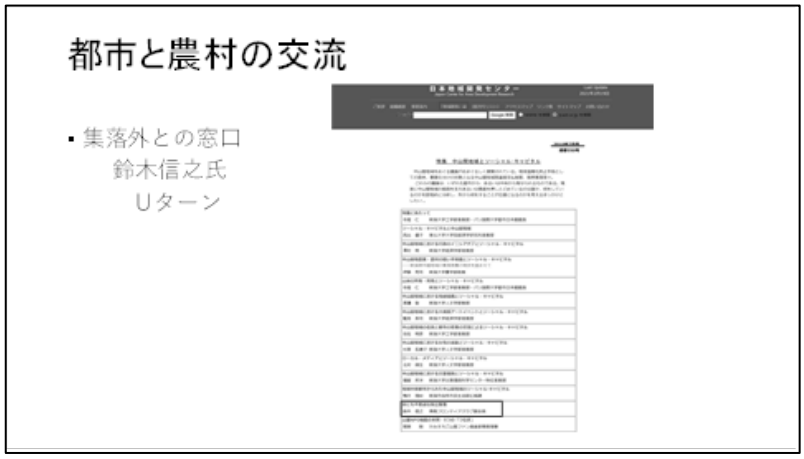
○高橋（コメンテーター）　高根で、今、能登谷さんもそうですが、来ていただいていますよね。移住して、魅力に引かれて、そこに定住をしていくというところまで到達しているわけです。これというのは高根でなければできなかったものかもしれませんが、そうい

うことがどこの地域でも可能性としてはあるのだよという事例にはなるわけですよね。

これから人流をしっかりキャッチしていく、人の流れをキャッチしていくということが多分重要になっていて、その中でも特に、ほかの地域でも、例えば、海岸線の山形県境の山北地区というところもあるのですが、そこでも進められていますが、例えば、大学との交流、これは非常に実は有益だなと思っておりますし、また、ＴＯＴＯさんが入っていらっしゃいますが、ほかのところにも幾つかそういうアプローチはあるのですが、企業との連携。今回、コロナ禍の中でありますから、多分そういうところはどんどん加速する可能性がありますので、しっかりとした社会情勢の背景を踏まえながら、多分そのあたりを少し後押しすると動き出すというところがいっぱいあるのだろうと思います。

あとは、地域起こし協力隊、また、集落支援員、これも国制度でありますが、こういったものを存分に活用して、外からの知恵であったり工夫であったり、そういうものを受け入れる、そういう環境づくりが高根にはあった。この成功した事例をよそで展開できれば、そういうものがスムースにいくのだろうと思っております。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。今、地域外の力とか、地域外の人たちとの交流の中で、１つ例として挙がっていたのが大学との連携ということですが、この点に関して、地元の大学の寺尾先生、お願いします。



○寺尾（コメンテーター）　あまり固有名詞を挙げてもどうかとは思ったのですが、鈴木信之さんが集落外との窓口は非常に重要な役割を果たされていて、鈴木さんがＵターンということが大きかったと思います。今、市長がおっしゃったように、外との交流、外から人が入ってきてくださるということは重要なのですが、そうするための１つのきっかけは、Ｕターン者が集落の中で大切にされる、頼りにされるような状況をつくることが重要かなと思います。

日本地域開発センターが発行している『地域開発』という雑誌の2010年の７月号に、我々が高根に入って２～３年ぐらいしたところで、我々の当時の研究成果をまとめて発表したのですが、そのときにもに鈴木さんに短い文章ですが、書いていただきました。当時、

鈴木さんはフロンティアクラブ副会長で集落のこともわかっていて、しばらく集落外に出て外で勉強して働いて、集落外の感覚がわかった方が戻ってきて、集落の中でそれなりの活動ができる。それが大学と結びつくことができた要因の1つです。

そのときに私が大学側でなぜ鈴木さんにお目にかかることができたかというと、私、実は先ほど入会の話を少ししましたが、新潟県の入会林野整備コンサルタントという仕事を引き受けていて、そんな縁もあって、先ほどお話ししたように、高根生産森林組合は、大変優秀なので、高根を知るきっかけができました。幾つかの偶然はありますが、集落側としてはUターン者は非常に重要だと思います。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。地域にとって、能登谷さんのようなＩターンも大切ですが、Ｕターンもかなり大きな位置を占めており、高根フロンティアクラブが評価された点の一つだと私は考えています。鈴木さんご自身の経験を踏まえて、フロンティアクラブでもいいですし、高根地区全体でもいいですが、Ｕターンの方々の地域における位置づけをお話しいただければと思います。

○鈴木（業績発表者）　私、一応はUターンで、高校を出て、東京に４～５年行って、また帰ってきたということで、なぜ帰ってきたかと言われると、母親に「帰ってきなさい」と言われたから帰ってきたというのが実際のところあるのですが（笑）。

私自身、高根は大好きで、ここに帰ってきて、非常に居心地がよかったし、仲間もいたというのが一番大きな部分で。我々の集落、我々の年代であれば、今、廃校になった学校に９年間一緒に通った仲間たちが、集落の中に残っていたので、帰ってくれば、いろいろな話もできたり、若干先輩であっても普通につき合いができたというのが、非常に大きなUターンの原因だったかなと思っております。

今の若い人たちも幾らかずつは戻ってきているのですが、当然、長男の方々が戻ってきているというのが実際で、その子どもたちも、高根の集落内のコミュニティ、運動会であったり、盆踊りがあったり、そういうものが継続してつながっていく中で、集落に帰ってくれば楽しみがあるというようなところが、Ｕターンの一番大きな原因だったかなと思っています。

当然、我々も、Ｉターンというか、向こうから移住される方も、当然喜んでいるのですが、Ｕターンの方々は、それ以上に喜んで受け入れてというのは当然ありました。

そういう中で、ただ、若者が今どういうふうな思いの中でUターンしているかというのは、多分能登谷のほうが一番よくわかるかなと思っていますので、その辺は能登谷に聞い

ていただければと思います。

○福与（コーディネーター）　では、能登谷さん、お願いします。

○能登谷（業績発表者）　私も高根のＵターンがとても多いというのはどうしてなのだろうというのを、学生時代通っていたときからずっと気になっていたところなのですが、実際、若い人たちと話してみると、一番は「高根が好き」という思いがあるというところだなと思っています。何で高根が好きなのだろうというのを掘り下げて聞いてみると、20代後半から30代ぐらいの世代は、ぎりぎり高根小学校、今、廃校になってしまっていますが、廃校になる前の小学校に通っていた子どもたち世代なのですね。高根小学校があったときには、小学生たちが集まるＰＴＡ行事もたくさん地域で行われていたし、学校の授業で算数でも理科でも社会でも、みんな地域の中に出て行って、地域の人たちから話を聞いたりだとか、地域の人たちから学ぶという機会があったので、自分は高根の人たちみんなに育ててもらったという感覚があるのだという話をしてくださいました。

なので、そういった教育があったからこそ、高根に帰ってきやすかった、高根に帰りたいというふうに思えたのではないかなと思いますし、私たちＩターン者にとっても、Ｕターンの方たちというのはとても心強い存在でして、高根の中にある、それこそ明文化されていない暗黙のルールみたいなものを、私たちでは気づけないところが、一旦外に出ている皆さんが、こういうところはこういうふうにしたほうがいいよとか、いろいろ行事のことですとか、屋号のことですとか、家同士のこととか、そんなことを私たちに丁寧に教えてくださって、地域の方たちとの間を取り持ってもらっていますので、Ｕターンの方たちがいてくださるというのは、私たちＩターンにとってもとても大きなことだなと感じています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

次に、取組について、少し具体的なお話をお聞きします。高根の取組として耳新しいものとして「準村民制度」があります。能登谷さんでも、鈴木会長でもどちらでも結構ですが、「準村民制度」が、いま、どのように進められているのか、お話しいただければと思います。

○能登谷（業績発表者）　では、私から説明させていただいたので、画面共有してもいいでしょうか。

○福与（コーディネーター）　お願いします。

○能登谷（業績発表者）　「準村民制度」というのが、高根に住んでいなくても、高根の

一員として、高根の温かい人のつながりを感じながら支え合い、笑い合える仲間、「たかねびと」という制度を始めました。これを立ち上げたきっかけというのが、私たちはＩターン、移住していますが、高根がこれから未来を考えていくに当たって、移住だけが全てではないと感じたのです。高根との多様なつながり方を提案して、都市部に住みながら、高根に自分がかかわりたい方法でかかわっていける、そんな仕組みができれば、笑顔の輪を広げていって、高根の魅力を未来につなげていくことができるのではないかと思って、準村民制度を立ち上げました。

簡単に中身をご説明すると、3,000円から１万円ぐらいのふるさと会員みたいな制度というふうに考えていただければいいのですが、年会費を払うと、高根に宿泊できる宿泊券だったりとか、お米だったりとか、高根暮らしが体験できるチケットというのがプレゼントされます。そして、その「たかねびと」になってくださった皆さんには、高根で田植えとか天体観測とか、高根の中の暮らしがわかるような、わくわくするミッションに挑戦してもらって、そのミッションをクリアしていくと、だんだんポイントがたまって、「たかねびと」レベルというのが上がっていって、高根と自分とのかかわりが可視化されるというような仕組みがつくられています。

この仕組みを使えば、移住するというのを目標にしてではなくて、高根といろいろな形でかかわってもらう。都会に暮らしながら、月に１回高根に来るのでも、年に１回高根に来るのでもいいですし、お米を買うだけでもいいですし、多様なつながり方をしながら、高根を応援してもらいたいという思いで「たかねびと」という準村民制度を立ち上げました。

○福与（コーディネーター）　現段階はどんな感じですか。実態としては。

○能登谷（業績発表者）　それが、ちょうどこれを始めたときがコロナ禍で、なかなか来てくださいというのが難しい状況になってしまっていたので、今、実施しているのは、高根のお米の販売ですとか、あと、高根の山菜をこちらからお送りして、オンラインでその山菜を使った料理教室を行ったり、あと、こちらから高根のおつまみを送って、一緒にオンライン飲み会をしたり、そんなような活動をしているのですが、もう少し人の行き来ができるようになったら、高根のおじいちゃん、おばあちゃんたちに先生になってもらって、高根暮らしが体験できるような機会をもっとつくっていきたいなと思っています。

○福与（コーディネーター）　わかりました。

今、高根のいろいろな産物の話が出ました。先ほど、寺尾先生からは、地域づくりと農

林漁業の振興は別だという話も出ていますが、ある程度は、会を回していくためには、それなりにお金を生まないといけないかなと思います。一般的には６次産業化が取り組まれることが多いわけですが、高根の場合はどんなことに今取り組んでいるのか、補足してください。

○鈴木（業績発表者）　６次産業化ということで、我々、廃校利用の当初から、加工場をつくりました。食堂のほかに、イワナの燻製の加工場と、山菜の燻製の加工場ということでやったのですが、山菜の加工場がなかなかうまく回らなかったというのが１つあります。イワナの燻製については、我々の仲間というか、会員が、イワナを養殖されていたので、それを活用して少し進めてきました。ただ、それもそれほどの利益が上がらないのは確かでした。

現在、６次産業化という自体が、我々としても非常にどうなのかなというところも１つあって、今現在、農業というか、生産して、それを加工するまでの人間が地域の中にそれほどいません。それだったら、生産のほう中心に行うほうがいいのではと思っています。減反政策の中でそば栽培をやっていますので、その辺を会員で作業をやって、作業の部分で幾らか浮いたお金を会の資金としていろいろな形で回しているのが実際です。もう一つは、それをＩＲＯＲＩで使うことで、流れ的にはそんな形でそば栽培が大きな部分です。

あとは、先ほど言ったどぶろくになるのですが、どぶろく自体は、一応、年間400～500リットルを売っています。フロンティアは実際には任意団体なので、フロンティア自体で売ることにならなくて、私自身が生産、販売している形になっています。その辺が今後の課題です。そのような形で、なかなか６次産業化までは手が回っていないのが実際です。

○福与（コーディネーター）　無理して６次産業化すると、せっかくの地域づくりが行き詰まってしまう可能性もあるかもしれませんが、今後いろいろ期待させていただきたいと思います。

具体的なことでお聞きしたいことがまだ山ほどあるのですが、時間が迫ってきました。やはり「高根が好きだ」ということで、Ｕターン者、Ｉターン者がそれなりにいるということを見ても、どこに高根の魅力があるのかという点が知りたいところです。すでにお話しいただいたかもしれませんが、村上市の高橋市長からと、電話取材された畠山委員から、もう一度高根の魅力を語っていただければと思うのですが、よろしくお願いします。

○高橋（コメンテーター）　今も、鈴木会長、また能登谷さんからいろいろ話を聞かれて、皆さんも、ああ、こういうコミュニティなのだというのは大まかにイメージができている

と思うのですが、まさにそういった日常的な取組を着実に積み上げてきた。それを集落全体で受け入れてきたというのが高根の魅力であり、高根の力なのだろうと実は思って聞いていました。ちょっと抽象的な言い回しになって申しわけないのですが。

その中で特に、先ほどちょっと触れたのですが、高根の集落の規模感と言うのですかね。確かに、雪も多いし、大変なのです。高低差もある集落なので、生活するにはなかなか大変なのですが、であるがゆえに、隣近所の皆さんがしっかりとサポート体制をつくろうとしなくてもできているという歴史をずっと重ねてきた。160世帯、550人を超える集落の規模感というのが非常に大きいなというのと。

山を中心にした産業そのものについて、これは基盤がしっかりしていることですね。ベースにそういうものがあって、その中でしっかりと連携をしてきているという、これまでの歴史があるのだと思います。

加えて、そこのところに新たなそういった改善が吹き込まれたとき、Ｉターンとか、そういうものが発生したときに、しっかりそれを受けとめられるだけの体力が、これまで成熟をしてつくり上げられてきたのだろうと思っています。

今、皆さん、鈴木さんも能登谷さんも、いろいろな形でお話をして、なるほど、すごいなというイメージをお持ちかもしれませんが、それと同じぐらいに大変なこともいっぱいあるのですね。それを乗り越えてきたからこそ今があって、また、乗り越えるためには、地域の皆さんの協力が絶対なければ、やさしくそれを受けとめていただける、先ほどの電子レンジの話ではないですが、そういうふうな意識が常に醸成されていることが高根の魅力なのだろうと思っています。

村上市内には227の集落があるのですが、多くの集落、全部の集落ということだろうと思うのですが、少なからずそういうものがあります。ですから、そういうところが、今、動いていないところ、機能していないところに、高根のそういった機能させることができたという知恵であったり、具体的な事例をそこにポンと当てはめてあげるだけで、しっかりとそういうものが動き出すことになるのかなと思っております。

ただ、高根もそれこそフロンティアスタートから20年を超える時間がかかるわけですね。この時間を我々行政としてはどれだけ短縮できるかというところにも実は知恵を出していく必要があるだろうと思います。成功事例を速やかに成功体験につなげることができるようなものにしていく。そのためには、鈴木さん、能登谷さんに、これからもいっぱい力を貸してもらいたいと思っています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

地域の規模感という点は、大変重要な論点だと思います。高根の人口・世帯数は、新たなコミュニティを考えていくときに、程よい規模だということですよね。高根は、もともと学校があった学校区だったわけで、大き過ぎなく、小さ過ぎなく、程よい規模だった点は、新たなコミュニティつくっていくときには、大変参考になると感じました。

それから、今、市長さんがおっしゃられた「時間」も非常に重要だと思います。市長さんがおっしゃるように、20年かかるのをもっと短くというのも１つの考え方ではありますが、逆に私は、行政のほうには、もうちょっと地域と気長につき合っていただきたいと思っています。行政の感覚では、どうしても３年、５年で成果を出さないといけないということになりますが、むらづくりには10年は必要だと思います。行政も、少しその点は我慢というか、地域と気長につき合っていただくことができれば、地域づくりももっとうまくいくのではなかと考えながら聞いていました。

ありがとうございました。

では、畠山さん、よろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター）　私は、Ｉターンの方々が戻ってきて村おこしをする例は幾つも見てきたのですが、そこで何が起きるかというと、大体、外から入ってきた人たちの価値観と、もともとそこに暮らしていた方々の価値観がぶつかり合ってしまうことはよくあるのですね。ところが、高根の場合は、もともと、私はこうしたい、こんなむらづくりをしたいのだというよりも、そこにいるのが楽しいからという部分が共通しているんです。外から来る方も、中に入っていらっしゃる方も。それがすごくいいなと思った例が１つあったのですが、伝統文化を残したいという地域はたくさんありますよね。高根も実は残したのですが、伝統文化を残したいがためにやったのではなくて、たまたま能登谷さんが結婚するときというタイミングがあって、だったら、昔あったタンス送りという文化を復活させようぜと。鈴木さんに聞いたのです。なんで復活させたのですか。そうしたら、結婚式なんて久しぶりだし、みんな飲みてぇからやったのだと言うわけですよ。実はそれがすごく大切な動機づけだと思うのですね。

つまり、僕らは、むらづくりというと、ある程度の価値観で、こういう方向性でむらを持っていこうとか、あるいは、こういう支援をしたらいいというふうに思う方が多いと思うのですが、自然発生的に出てきたものをうまくサポートしてあげる。寺尾先生が、ピザ窯だってあるのだというお話がありましたよね。どうしても国や行政などは、こうこうこ

うあるべきだ。だから、こういった部分で支援をしますというふうにするのですが、そうではない、もっともっと自発的に出てきたものをどう応援してあげるかということが、地域の文化を残していったり、むらづくりになっていったり、引いては多くの人たちを引きつけるのではないかなと感じています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。

今のお話は、とても示唆的だと思います。行政のサポートは大変重要だと思うのですが、行政的に考えると、ついつい目標設定して、それから逸脱しないようにコントロールするようになりがちです。しかも、そんなに長い期間をかけずに短期間で行う取組が中心になってしまうのですが、やはりこういったように自由にあっちこっち行くのを、むしろ逸脱していくのをサポートしていく。ちょっと変な話ですが、そういったことがこれからの地域づくりにおける行政支援には必要になっていくのではないかと受け取らせていただきました。ありがとうございます。

さてディスカッションの最後に、今後の課題と展望という点に話を移させていただきます。

それでは、まず、高根フロンティアクラブのお２人から、これから活動を進めていく上での課題や展望をお話ししていただいた後、村上市長、畠山委員、寺尾先生から、アドバイスあるいは何かコメントをいただければと思います。

それでは、鈴木会長からまずお願いします。

○鈴木（業績発表者）　フロンティアクラブ、2020年は、それこそコロナ禍でほとんど活動ができなかったことがあります。というのも、我々のフロンティアの活動が外の人たちを呼び込むという活動が中心であったため、ほとんどできなかったのが実際です。

今年１年、いろいろなことを考えてはきたのですが、我々の2020年の方向性からして、新しいコミュニティの形成ということで、今後はフロンティアクラブ自体も、もう一回集落のほうに目を向けて活動の方向を考えていきたいなということが１つあります。ただ、それだけでは集落は活性化しないので、今までどおり、集落外の呼び込みだったりという部分は当然進めていきたいと思っております。

ただ、フロンティアクラブ自体、高齢化というか、年齢的にも上がってきて、当初の目標が集落の中心になったときに、自分たちの集落をという思いがあったのですが、今、ほとんど、フロンティアの会員が区の役員だったり生産森林組合の役員になっていますので、その辺、今後の活動としては、「わぁら」の活動を支援しながら一緒に活動していき、そして、徐々にフロンティアは引いていくというような方向も少し考えられるのかなと思っ

ております（笑）。

ただ、でも、まだこれから10年、もっと頑張っていきたいなと、そんなことは思っております。具体的なところはまた「わぁら」のほうで考えていけるのかなと思っていますので、能登谷のほうでよろしくお願いします。

○能登谷（業績発表者）　いやいや、信之さんには100歳まで頑張って地域づくりに取り組んでいただきたいなと思っているのですが（笑）。

高根が抱える課題というのは年々増えてきていますし、それを全て解決するのは難しいなと思って、正直、初めに鈴木がご紹介した人口推計では読み切れなかった人口流出もたくさんありますし、空き家の課題も本当に深刻です。でも、ここに暮らしている人たちが楽しく生き生きと目をキラキラさせながら過ごせること、そして高根にかかわってくださる外の人たちというのが「大好きな高根とつながれてよかった」と言ってくださるような関係がつくれるようなことを増やしていきたいなと思っています。

高根の森を今まで守ってきた先人たちが50年後とか100年後の未来を考えて木を植えてくださっていたということを聞いて、私たちも子どもたちとか孫たちの世代に高根の人の温かさだったり、自然の豊かさだったり、そんな魅力をつないでいけるように、世代とか、団体とか、住んでいる地域とか、そんな枠を全て超えて、一つになって高根の未来のために動いていけたらいいなと思っています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

高橋市長、市長からアドバイスをよろしくお願いします。

○高橋（コメンテーター）　アドバイスというか、ともに歩いていきたいなとは思っています。先ほど規模感の話をしましたが、高根は、まだまだ、それこそ今、能登谷さん、鈴木会長には100までという指令が出ましたので、100まで頑張ると思いますが、それが可能なところと、実は村上市には、集落の単位が、例えば、15世帯で30人とか、50世帯で150人とかという集落もいっぱいあります。そういうところが同じような形の取組ができるかとなると、なかなか難しいので、その辺は、少しコーディネートをし直した形で、こうしたらどうなのというようなことを高根の皆さんと共有できればいいなという形で考えていますので、そんな取組を少し広げてもらいたいなということ。これはお願いですが。

それと、今回、取組がなかなか思うようにいかなかった中で、逆に言うと、コロナ禍の中でオンラインでのやり方というのが加速度的に進みました。こういうところをどんどん活用しながら、準村民制度などもオンラインでつながってさえいれば、準村民であるわけ

であります。つながり方はいろいろあると思うので、そういったところをこれからデジタルトランスフォーメーションの分野を存分に活用するというのが１つ重要だなと思っています。これは必ずや距離感を埋めることができますので、時間を共有して距離感を埋めるということになると思います。そんなところをお考えになるといいかなと思います。

福与先生、先ほど、行政として長い目でじっくりと応援をしてあげてほしいというお話でしたが、そうするつもりではいます。ただ、人口が減少する度合いがそれを超えて早かった場合には、待ったなしでそこに手を突っ込まなければいけないという事情もありますので、その辺のところは、高根の成功事例を活用しながら、臨機応変に、早くやらなければならないところ、じっくり見ていかれるところ、これを選択しながら、行政として支援を申し上げていきたいと思っております。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。

それでは、今度は畠山委員からよろしくお願いいたします。

○畠山（コメンテーター）　確かに人口減少は急激に進むかもしれませんが、今日のお話を聞いていて、多世代、多地域との交流を大切にしているとおっしゃいましたよね。つまり、関係人口を増やしていく。ファンを増やすことにもつながると思うのですが、確かにそこに住む人たちは減るかもしれないが、こうしたことをずっと築いていくと、いずれ、誰かが何かでこのまちを新たに好きになってくれる人が増えるような気がします。その方の価値観がまた新たな高根の魅力を拾ってくれるのじゃないかなという気もしますので、そのあたりはぜひ多世代、多地域、ずっと続けていただきたいと思います。

特に、多世代という部分では、じいちゃん、ばあちゃんたちの知恵というのはものすごいですよね。今、大きな震災、今年、10年を迎えますが、電気が切れた、水がないというときに、じいちゃん、ばあちゃんたちはちゃんと生きていくんですよ。そういう知恵というのを、逆に高根のほうから全国に向けて発信してくれるとか、そういった形もぜひ期待したいと思いますので、よろしくお願いします。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。

それでは、寺尾先生、よろしくお願いします。

○寺尾（コメンテーター）

だいぶ皆さんから大きな話が出たので、私は、近くにいる者として、少し具体的な、偉そうな言い方ですが、注文を3点します。

最初は「活動のアップデート」。これはどういうことかというと、今日、随分話題になったＩＲＯＲＩですが、2015年のＩＲＯＲＩのメニューと2019年のＩＲＯＲＩのメニューを比べ見ると、先ほど鈴木さんもイワナの燻製はうまくいったという話がありましたが、メニューに新しいものを加えることがなかなかできていない。新しい料理メニューを考えるのも、今日のお話にあった楽しみの一つだと思うので、今までうまくいっていたことを、さらに現在の状況に合わせたり、あるいは、高根の中で新しく何かこういうことをしてみたいというものが、うまく目に見えるような形で反映していただけるといいなと思っっています。

２点目は、女性の地位。ここのところ大きく話題になっていますが、先ほどの能登谷さんのお話にありましたが、私などは高根の女性に調査でインタビューをするということはあっても、今日のように、どういうふうにお考えでしょうかということをやりとりした経験がなかったので、今日、とても貴重だったのです。高根でも、女性の地位、男がさまざまな物事は決めて、女の人がそれを支える下働きという状況を少しずつ変えていかないといけない。女性でＵターンして来てくださる方がどのぐらいいるかというのは大きな課題かなと思います。

３つ目が、これは、先ほど能登谷さんのインタビューのご報告にもあったのですが、今まで同世代のコミュニティが維持できていた、そして同世代のコミュニティでさまざまなむらづくり組織をつくっていたのですが、学校が統廃合でなくなった。学校があると子どもたち同士のつき合いだけでなくＰＴＡなどで保護者のつながりももう一回そこでできます。この問題が今後高根にどういうふうに影響を与えていくのかというのは、私も全く予想がつかないし、こういうふうにしたらどうでしょうということも全く言えないのですが、この点については、高根の方がぜひ意識的に考えていただきたいと思いました。

今後の活動について、少し偉そうですが、３点お話をしました。以上です。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございました。

本日、高根フロンティアクラブについて改めてお話を伺って、新たなコミュニティの形

を見せていただいたと思います。

今、いろいろなところで「自助、共助、公助」といわれています。国会では、総理大臣が「まずは自助でしょう」と言えば、野党が「公助でしょう」と言っていますが、地域づくりにおいては、真ん中の「共助」が大変重要だと思います。ちょっと大げさな話をすると、近代化、過疎化、高齢化、混住化、兼業化、そういったものが進んできたときに、地域社会という「共助」の基盤となる中間集団が弱くなったと思うのですが、高根フロンティアクラブの取組により、新たな中間集団の姿を、先ほど市長さんがおっしゃったような規模感、時間的な軸を持って、見せていただいたと思います。

本会は、新たな地域づくり組織の姿を見ることができたということで、大変有意義な会になったのではないかと思っております。もっと時間があれば、いろいろとお話をお聞きしたかったのですが、パネルディスカッションは、ここまでにさせていただきます。

○司会　パネルディスカッション参加の皆様、有意義な意見交換、まことにありがとうございました。また、オンライン参加の皆様方も、休日にもかかわらずご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウム、終了いたします。

なお、本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を私ども農林漁業振興会のホームページにアップいたしますので、今後のご活動に役立てていただければと思います。

なお、オンライン参加の皆様には、ご案内メールを送信した際に添付いたしましたアンケート用紙があったかと思います。こちらにご記入の上、返信していただければ幸いでございます。

以上でございます。

本日はまことにありがとうございました。

－閉会－

令和２年度（第５９回）農林水産祭

（第２６回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（若者の目もキラキラ、 世代を超えて自発的に
取り組むむらづくり）

発　　行　令和３年５月
編集・発行　公益財団法人　日本農林漁業振興会
〒１０７－００５２
東京都港区赤坂１－９－13　三会堂ビル７階

TEL　（０３）－６４４１－０７９１（代）
FAX　（０３）－６４４１－０７９２
URL　http : //www.affskk.jp

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。